

いるかの遺跡

発掘調査報告書

1983

東北農政局

山形県教育委員会

いるかい遺跡

発掘調査報告書

1983

東北農政局

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和56・57年度に実施した国営新鶴子ダム建設に伴う土砂採取事業に係る「いるかい遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

自然の豊かな尾花沢盆地には、丹生川流域を中心に数多くのすぐれた遺跡が発見されており、本遺跡もその中の一つであります。調査の結果、本県では例の少ない縄文時代早期の押型文ある土器をはじめとする貴重な遺物群、縄文時代前期や後期の堅穴式住居跡などの遺構が検出されました。先人の生活と自然との係りをたどる大きな手懸りを得る事ができたと言えます。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、困難な問題も山積の状況ではありますが、両者の調整を行い埋蔵文化財の保護を計る事は重要な課題と考えます。県教育委員会におきましても、生活文化の向上とする同一立場からこれらの調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本調査にご協力いただいた尾花沢市教育委員会・東北農政局北村山農業水利事業所・同鶴子支所並びに関係機関各位に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和58年3月

山形県教育委員会
教育長 大竹 正治

例　　言

1 本報告書は、東北農政局の委託を受け、山形県教育委員会が昭和56・57年度に実施した国営「新鶴子ダム建設工事に伴う土砂採取事業」に係る「いるかい遺跡」の発掘調査報告書である。

2 遺跡所在地・調査体制は下記の通りである。

遺跡名　いるかい遺跡（COZIK）　遺跡番号（783）

所在地　山形県尾花沢市大字鶴子字定本（俗称いるかい）

調査期間　昭和56年5月25日～6月5日（第1次）昭和57年5月6日～6月10日（第2次）

調査主体　山形県教育委員会

調査協力　尾花沢市教育委員会・東北農政局北村山農業水利事業所・同鶴子支所

調査担当（第1次）主任調査員：佐々木洋治 現場主任：名和達朗 調査員：渋谷孝雄

調査員：中嶋 寛（山形県教育庁文化課）

（第2次）主任調査員：佐々木洋治 現場主任：阿部明彦 調査員：佐藤正俊

調査員：長橋 至（山形県教育庁文化課）

3 挿図の縮尺は、遺構縮尺で $1/60$ ～ $1/100$ 、遺物では $1/2$ ～ $1/4$ を原則的に用いている。図版における遺物の縮尺は、 $1/2$ ・ $1/3$ ・ $1/4$ のものがある。また、各挿図中にスケールを入れ、その縮尺を明示した。図版では（1：2）等の記入を行っている。

4 挿図・本文中の記号は、ST—住居跡、EP—柱穴、EL—炉跡、SK—土壤、SD—溝跡、SX—性格不明土壤、SP—小穴等である。その用法や意味については本文中でも簡単に触れている。

5 本文中の遺物の提示は、拓影図を中心としたが、縄文早期の一部土器片、後期の器形等が復元し得るものについて実測を行い図化している。拓影図掲載遺物については表一4で観察一覧とした。図版中の遺物では、表一6にその出土地点・遺構について記している。石器については、遺憾ながら充分に検討し得なかったため、概略的に述べるに止めた。土器では、後期の一群について資料操作・分析が不充分である。

6 本書の作成は阿部明彦が担当した。挿図・図版の作成は、鏡 克子・前田和子・清野匡子・遠藤淑子・後藤 浩（文化課）、石川みどり・山口美保子・山口美和子他（山形大学学生）の協力を得た。編集は阿部明彦・渋谷孝雄があたり、全体について佐々木洋治が総括した。なお、本書の作成に当たって、加藤 稔・安孫子昭二・奥野義一・名久井文明・大槻 誠・山口博之・佐藤嘉広の各氏および同僚諸兄より御教示を賜わった。文末ながら記して感謝申し上げる。

目 次

I 調査の経緯	IV 遺構
1 調査に至るまでの経過.....1	1 1次調査A・C地区.....13
2 調査の方法と経過.....2	2 2次調査C地区.....16
II 遺跡の立地と環境	V 遺物
1 遺跡の立地.....7	1 土器.....26
2 周辺の遺跡.....9	2 石器・石製品.....38
III 遺跡の概観	VI まとめ
1 遺跡の層序.....10	1 出土土器について.....39
2 遺構と遺物の分布.....10	2 遺構と遺跡の性格について.....41

挿図目次

第1図 遺跡位置図.....1	第14図 S T 3 a + 3 b19
第2図 いるかい遺跡概要図.....3	第15図 S T 39 + S X 40他.....21
第3図 いるかい館跡.....4	第16図 S T 52 + S K 53 + 71~74他.....22
第4図 いるかいC地区調査概要図.....5	第17図 S K 22 + 25 + 51 + 59~61.....24
第5図 丹生川流域の早期遺跡の分布.....6	第18図 S K 5 + 7 + 63.....25
第6図 土器拓影図（1）.....8	第19図 押型文土器.....26
第7図 土層柱状図.....10	第20図 土器実測図（2）.....27
第8図 遺構分布図（C地区）.....11	第21図 土器拓影図（2）.....29
第9図 S K 4 + S D 213	第22図 土器拓影図（3）.....30
第10図 S T 20住居跡.....14	第23図 土器拓影図（4）.....32
第11図 土器実測図（1）.....15	第24図 土器拓影図（5）.....34
第12図 S T 1 + S K 4 + S X 817	第25図 土器拓影図（6）.....35
第13図 S T 2 a + 2 b + 618	

図版目次

図版1 遺跡遠景・近景	図版10 いるかい遺跡出土土器（早期）
図版2 S T 6 + 2 a + 2 b 全景	図版11 いるかい遺跡出土土器（早期）

図版 3	各住居跡・土壙	図版12	いるかい遺跡出土土器（前期）
図版 4	集石土壙・フラスコ状土壙	図版13	いるかい遺跡出土土器（後期）
図版 5	A地区遺構検出状況他	図版14	S T20出土炉体土器他
図版 6	A地区検出土壙	図版15	出土土器（中期）・遺構内出土土器
図版 7	S D 2 土層断面・S T20全景	図版16	遺構内出土土器・礫石器
図版 8	周辺出土の縄文早期の土器	図版17	石鎌・石錐・石匙他
図版 9	いるかい遺跡出土土器（早期）	図版18	範状石器・磨製石斧

付表目次

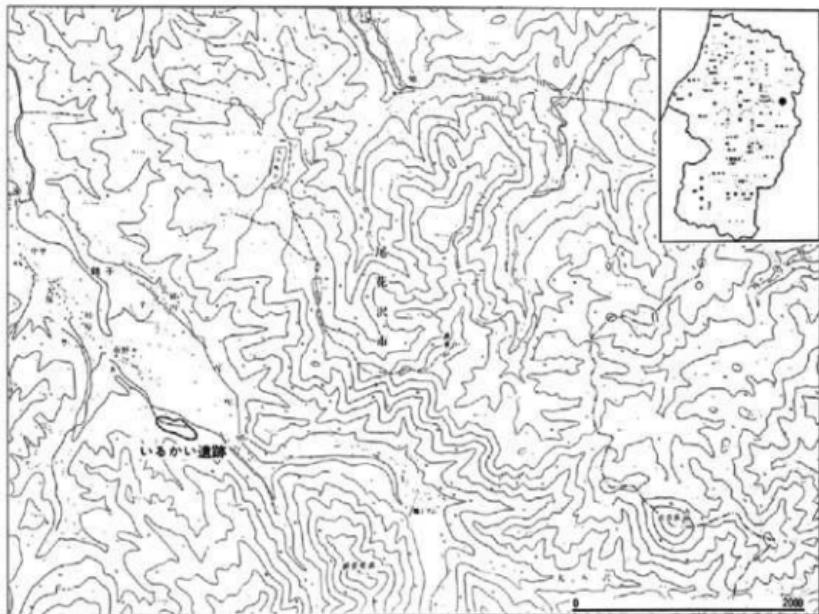
表一 1	第1次調査検出遺構一覧	2
表一 2	丹生川流域の縄文早期遺跡	7
表一 3	第2次調査C地区検出遺構一覧	12
表一 4	出土土器観察表	36
表一 5	縄文早期の土器類別一覧	39
表一 6	図版中遺物出土地区（遺跡）・層位一覧	42

I 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

いるかい遺跡の発見は、10数年前に行われた台地一帯の桑園造成を契機とし、昭和49年度に山形県教育委員会が県下一斎に実施した分布調査によって埋蔵文化財包蔵地として登録された。当時、開墾や耕作によって掘り起こされた土中から、地元研究者や子供達が、幾度となく遺跡を訪れては多数の土器・石器類を採集したものだと地元民等は云う。

昭和56年度、新鶴子ダム建設のための土取り工事が入ることとなり、事業主体の東北農政局・北村山農業水利事業所の分布調査依頼を受けた。調査は、昭和56年5月25日～6月5日まで延10日間実施され（以下第1次調査と呼ぶ。）、遺跡範囲の確認と、遺物包蔵状況の把握に主眼が置かれた。その結果、「遺跡は地形的に区切られる3地点（A～C地区）からなり、いずれも土砂採取予定事業区内に入る事、および遺跡は縄文時代早期から弥生中期におよぶ複合遺跡で、住居跡（S T20）の検出から集落跡である事」等が確認された。第1次調査の概略についてはすでに報告がなされている（山形県教委1982）。昭和57年度調査は、C地区約2,000m²を対象とする緊急調査（以下第2次調査と呼ぶ。）である。



第1図 遺跡位置図

（1:50000）

2 調査の方法と経過

第1次調査では、台地の地形に沿う 3×3 m を単位とするグリッドを設定し、北東→南西に X 軸、東南→北西に Y 軸とした。Y 軸は、N-46°48'→W を測る(第2図)。第2次調査でも調査グリッドの座標は第1次調査のそれと同一である。以下、第1次調査の各地点毎の概要を述べるが、検出遺構については、下の表-1で遺構一覧とし、IV章で補足する。

A地区 繩文時代中期および後期初頭期を中心とする大小の土壙 18基、中世の溝跡(S D 2)1基他(第3・9図下段)が各検出された。日計型押型文土器一個体(第19図他)数片がまとめて検出された SK 4(第9図)は、他時期のものを含まず注目される。SD 2は、A地区の台地突端を画す館跡の空濠と考えられ、後の開墾により削平と埋立てがなされた。

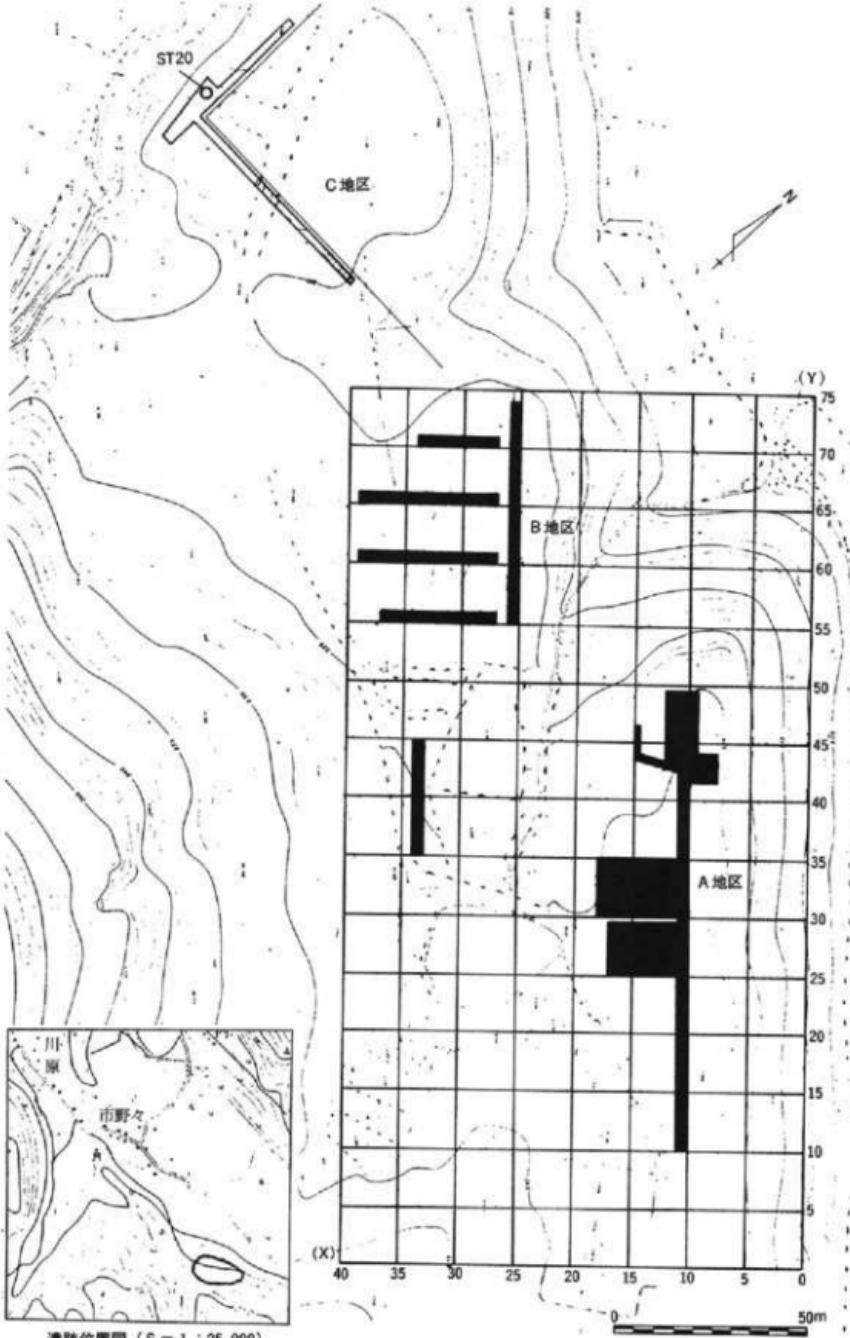
B地区 トレンチを6本入れて調査を行ったが、擾乱が著しく、良好な遺物包含層や、遺構の存在が認められなかった。

C地区 東側約5mは、昭和57年度事業区域内となるため、西側周縁部にトレンチ2本を入れて調査を行ったところ、繩文時代後期の円形プランをもつ住居跡(ST 20)および、性格不明の土壙1基(S X 21)を各検出した(第10図)。第2次調査では、トレンチ掘りを行った区域を除く東側を主対象としている(第4図)。

表-1 第1次調査検出遺構一覧

分類	No.	検出地区(G)	長径	短径	深さ	形 状	時 期	出土遺物	備 考
SK	1	15-29~16-29	126	100	107	不整円形 (プラスコ状)	中期 大木10	土器片 Q6 石器剣片(5)	底面径113× 120
SD	2	11-43	—	溝幅20	76	断面「V」字状	中世	土器片 (2)	地中に付するもの。 底面にあぐら。
SK	3	A地区北東端部	—	—	—	—	不明	土器片 (1) 石器剣片(3)	(未完形)
SK	4	76-28	113	88	44	不整円形 (プラスコ状)	中期 (日計?)	土器片 (8) 石器剣片(5)	底面に円錐1 個を含む。
SK	5	15-27~28	71	63	27	略円形	不明	石器剣片(5)	
SK	6	13-26~27	92	76	28	椭円形	中期 (大木10)	土器片 (6)	
SK	7	16-27	65	64	29	略円形	不明		
SK	8	11-12-31	76	48	21	不整橢円形	後期	土器片 Q6 石器剣片(1)	底面に2凹部
SK	9	12-31~32	72	65	17	不整円形	不明		
SK	10	12-13-32-33	80	65	12	不整方形	中期 (大木10)	土器片 (5)	変化クリミ若干を 含む。
SK	11	14-31~32	65	40	26	不整橢円形	不明		
SK	12	16-33	95	85	51	不整円形	後期 凹面	土器片 (3) (2)	
SK	13	12-32	60	60	11	略円形	後期 凹面	土器片 (2)	変化クリミ若干を 含む。
SK	14	13-27	56	50	17	椭円形	不明		
SK	15	14-15-32-33	106 150	106 46	48 46	不整方形 不整橢円形	不明		
SK	16	16-17-27	120	93	46~55	不整方形	不明		底面に2凹部
SK	17	12-31	55	47	19	不整橢円形	前中期	土器片 (3)	
SP	18	12-33	50	40	7	不整円形	中期 (大木10)	土器片 (4)	
SP	19	16-24	80	60	21	不整円形	不明		
ST	20	C地区	330	280	8~20	略円形	後期 凹面	土器片 Q6, 石器剣 片(5), 石器(4個)	堆積物 四王柱穴
SX	21	C地区	94	55	25	不整橢円形	後期 凹面	土器片 Q6, 石器剣 片(5), 石器(2)	

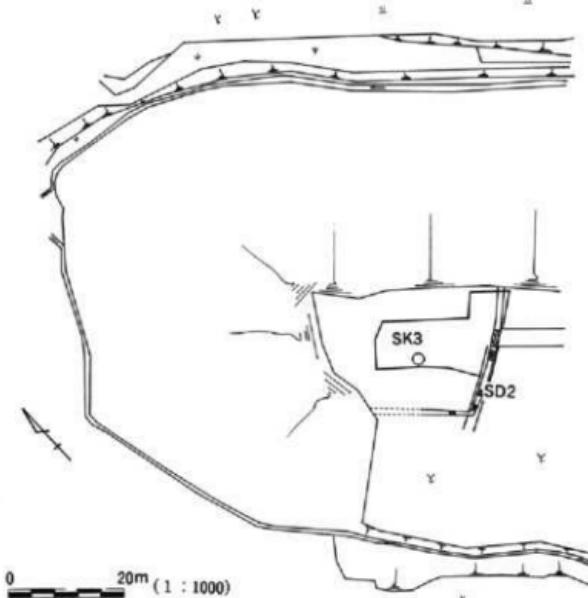
(cm) *表註 深さは、検出面から遺構各底面までの深さ。



遺跡位置図 ($S = 1 : 25,000$)

第2図 いるかい遺跡概要図

第2次調査は、以上の経過を踏えて、昭和57年度に予定される土砂採取事業区域約2000m²を対象として実施した。グリッド等については前記のとおりである。グリッド設定後、遺構・遺物の分布状況を確認するため、3×3m単位で坪掘りを行った。その結果

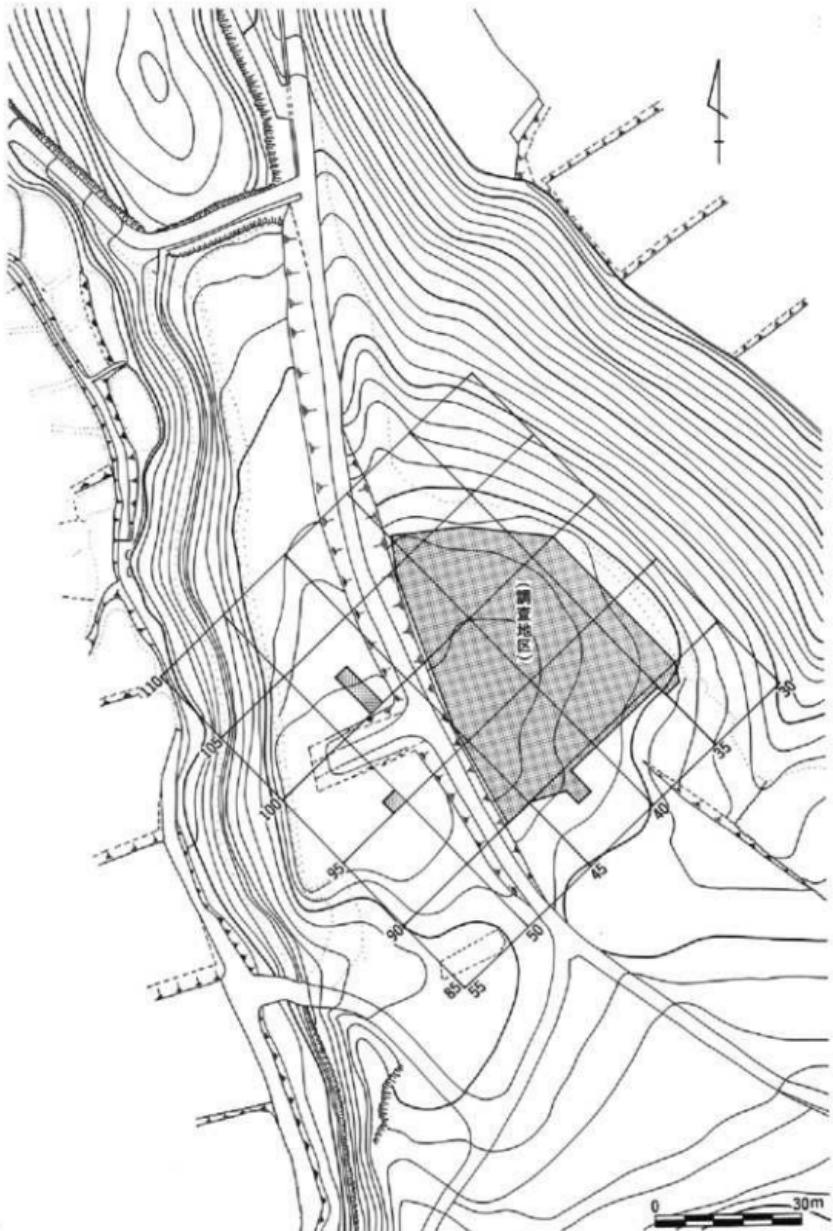


第3図 いるかい館跡

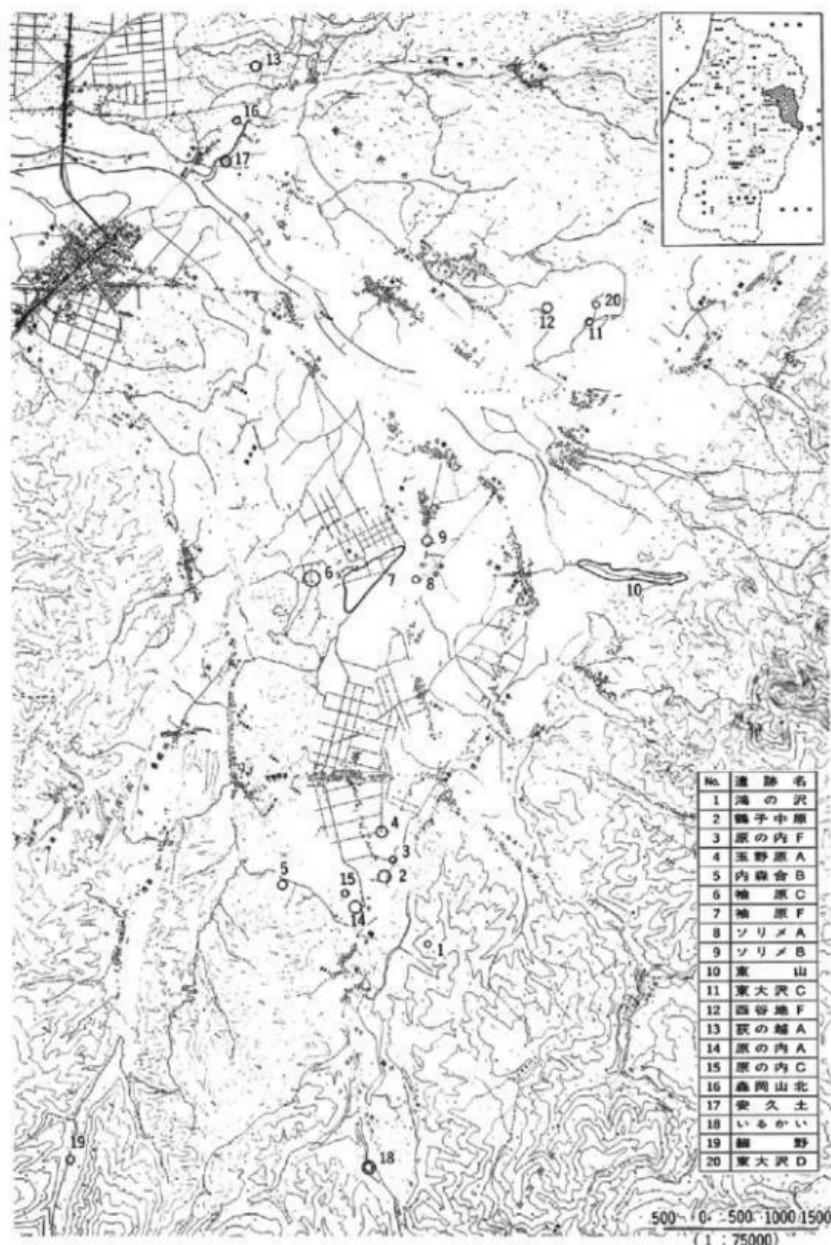
果、後に検出される遺構群、ST1・SK4・SX8の周辺、ST52他の周辺、SK7・57他周辺、ST2・3の周辺、ST37他の周辺等に係る5地点からより多くの遺物を検出し得たため、可能な限り拡張を行うこととした。最終的に約1400m²の調査区を設定し、遺構検出部分について精査・実測等の記録を行っている。

遺物の取り上げは、土層の観察(第7図)から、遺構の確認段階までの間I～IIを用い、プラン検出後は、各遺構毎にF₁、F₂、F₃…の如くその覆土の堆積層序と相対的に対比し得るよう配慮している。また、遺構底面ないし、床面上出土の遺物については、「Y」として取り上げを行った。一方、出土土製品の中で、完形土器や、半完形のもの、破片でも重要なと思われるもの等については量的に少ないのでRPN_oを付けて取り上げを行ったものがある。石製品も同様に、RQN_oを付けて取り上げを行い、その出土層位・状況を観察し記録化している。

第1次調査における遺物の注記は、「COBIK-A or B or C, □—□(グリッド名) I or II or F or Y(層位)」となり、第2次調査では、「COZIK□—□(グリッド名) I or II or F or Y(層位)」としている。なお、調査期間中の6月8日に「現地説明会」を行い、多数の市民の参加を得た。



第4図 いるかいC地区調査概要図



第5図 丹生川流域の早期遺跡の分布

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

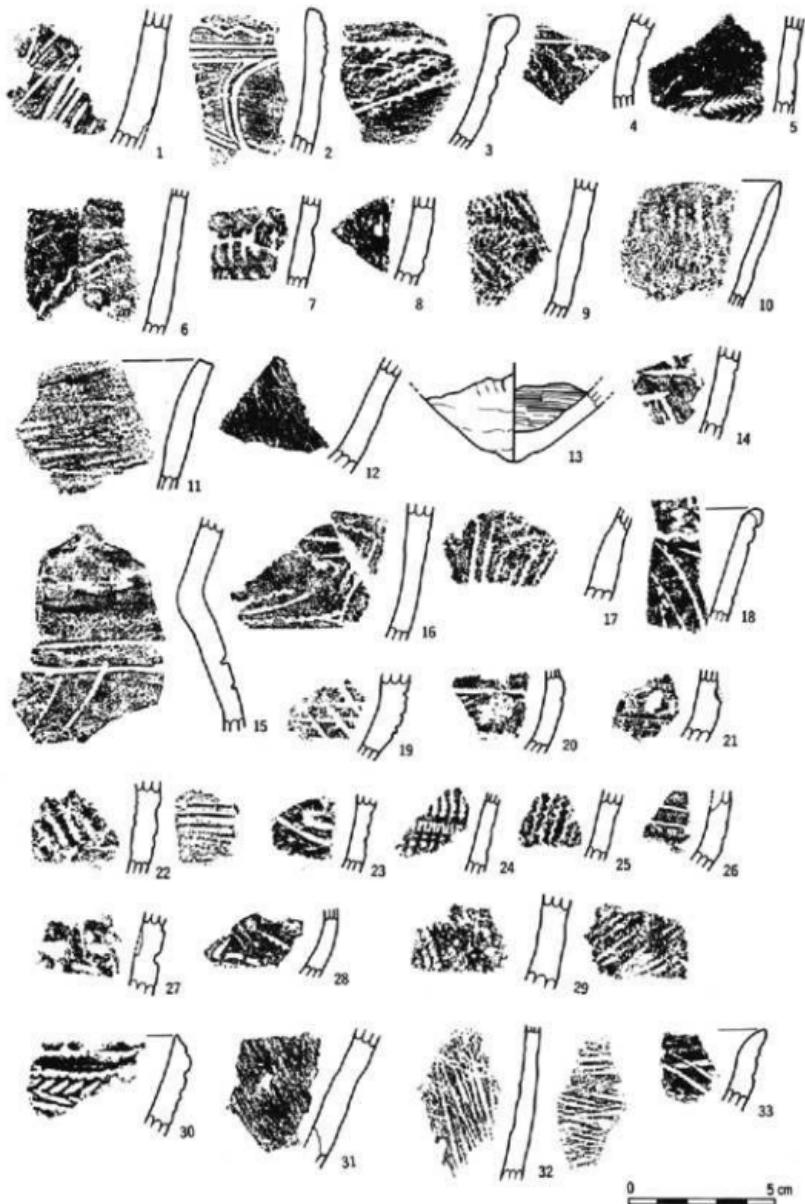
尾花沢盆地は、奥羽山脈から流れ出る大小の河川流域に開けた山間の盆地である。各河川は、間近かに迫る山々からびり出し、その両岸の所々に段丘を形成しながら盆地中央を西流する丹生川に注ぎ込む。隣接の内陸盆地や平野部とは峠道で連結し、封鎖的・独立的感が強い。盆地内の集落は、尾花沢市街を中心に、河川に沿う狭隘な山間の奥地まで扇状に点在し、いるかに遺跡もこうした丹生川本流の上流部、大字鶴子字市野々の近くにある。

遺跡は、丹生川の左岸、北西に細長く張り出す高位段丘上にあり、標高320m前後を測る。低位段丘までの比高10数m、丹生川川床面までの比高50数mと高所に位置し、見晴らしがよい。段丘面は、小さな沢の開析によりゆるやかな三つの起伏を示し、それぞれの高まりを中心で遺物の散布する状況が認められた。北東部から順にA・B・C地区とわれわれが呼ぶ各地点である。第1次調査は、主としてA・B地区を中心として行い一部C地区の南縁・西縁におよんだ。第2次調査は、C地区の中心部を対象とするものである。

なお、台地の北西側に隣接して、山麓を開析する沢があり、清流の絶える事がない。

表一2 丹生川流域の縄文早期遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	出 土 遺 物	挿 図・図
1	鴻 の 沢	尾花沢市大字鶴子字鴻の沢	条痕文系土器(1)	
2	鶴 子 中 原	尾花沢市大字鶴子字中原・字原の内	沈縄文系土器(1)、貝殻沈縄文系土器(1)、貝殻文(吹き瓶)、赤土器(3)、石器類	第6図1~13
3	原 の 内 F	尾花沢市大字鶴子字原の内	条痕文系土器(1)	
4	玉 野 原 A	尾花沢市大字下柳渡度字玉野原	沈縄文系土器(1)、条痕文系土器(1)、瓦状石器(1)	第6図14
5	内 森 合 B	尾花沢市大字延沢内森合	条痕文系土器(1)、石器(1)	
6	袖 原 C	尾花沢市大字延沢字袖原	沈縄文系土器(3)、纏文系痕文系土器(1)、田戸下層式期性	第6図19~22
7	袖 原 F	尾花沢市大字延沢字袖原	纏文系土器(1)、纏文系痕文系土器(1)	
8	ソリメ A	尾花沢市大字原田字ソリメ	沈縄文系土器(1)	第6図23
9	ソリメ B	尾花沢市大字原田字ソリメ	貝殻文系土器(2)、トランシェ様石器(1)	第6図24~25
10	東 山	尾花沢市大字鶴巣田字東山	沈縄文系(明神裏田式)(1)、瓦状石器(1)、石器(1)、石縫(1)、他	第6図29~30
11	東 大 沢 C	尾花沢市大字丹生字東大沢	纏文系痕文系土器(1)	
12	西 谷 地 F	尾花沢市大字丹生字西谷地	沈縄文系土器(2)、貝殻沈縄文系土器(1)、纏文系痕文系土器(1)	第6図26~28
13	萩 の 雄 A	尾花沢市大字田渕字萩	(大類鏡氏採集)	
14	原 の 内 A	尾花沢市大字鶴子字中原・山崎・大田	貝殻・沈縄文系土器(3)	第6図15~17
15	原 の 内 C	尾花沢市大字鶴子字立目	貝殻沈縄文系土器(1)、凹石(1)	第6図18
16	森 田 山 北	尾花沢市大字田沢	日計、沈縄文系土器、貝殻沈縄文系土器、条痕文系土器他多數、大類鏡、山口博之(1981)	
17	安 久 土	尾花沢市大字安久土	条痕文系土器他(阿部明彦採集)	第6図32
18	い る か い	尾花沢市大字鶴子字定本	日計、明神裏田、物見台、大寺上層式、条痕文系土器、無文系痕文系土器他多數	
19	細 野	尾花沢市大字細野	貝殻沈縄文系土器 加藤松(1960)	
20	東 大 沢 D	尾花沢市大字丹生字東大沢	沈縄文系土器(1)、瓦状石器(1)	第6図33



第6図 土器拓影図(1)
(周辺遺跡出土の土器)

1~13:中原 14:玉野原A 15~17:黒の内A 18:黒の内C 19~22:黒原C 23:ソリメA
24~25:ソリメB 26~28:西各地F 29+30:東山 31:玉野原A 32:安久土 33:黒大沢D

2 周辺の遺跡

尾花沢盆地を流れる丹生川水系・臘気川・野尻川の各流域には、その両岸の段丘上を中心約100ヶ所近い遺跡の存在が知られている。昭和57年秋に山形県教委文化課で行った丹生川上流～中流域を中心とする分布調査では、72ヶ所の新規遺跡が見つかり、これまで例の少なかった早期遺跡が「いるかの遺跡」を含めて20ヶ所に達した。従来注目されて来た細野遺跡・森岡北遺跡での内容に加え、資料的にまとまりある鶴子中原遺跡、その他断片的ながら貴重な資料がふえた事になる。これまでの、おぼろ気なその輪郭が、これら資料を加える事で、より鮮明となり、山形県北半部における縄文早期文化の土器様相を探る上で充分に有意である事は論を俟たない。以下では、これら早期遺跡を中心に「いるかの遺跡」周辺の遺跡を概観するが、その他の時期、時代の遺跡でも、川原遺跡（縄文後期～晩期）、発掘調査が行われた原の内A遺跡（縄文中期・晩期・平安時代）、原の内B～D遺跡、上柳渡戸八幡山遺跡（古墳時代、南小泉式～引田式期）等、質量ともにすぐれたものが少なくない。なお、周知、新規の縄文早期遺跡については、表一2でその概略を一覧とし、拓本等で資料化し得たものについては、第6図他で示した。遺跡位置については、第5図の通りである。また、分布調査報告書（10）（山形県教委1983）を参照されたい。

鶴子中原遺跡 丹生川左岸の中位段丘上に位置し、広範な散布を見る。採集遺物中には、縄文早期以外のものを含まず、沈線文（第6図1）、沈線と貝殻腹縁圧痕文（第6図2～4）、くの字状連続押引文（第6図5）、重層する貝殻腹縁圧痕文が並列多段、羽状多段で施されるもの（第6図7～10）他がある。底部では、内面に条痕文の施される乳頭状突起をもつ第6図13や、砲弾形に近いと考えられる第6図12の破片がある。全体的には、明神裏III式、田戸上層式、物見台式、吹切沢式、大寺上層式等の内容を持つものと考えられる。なお、提示し得なかった資料も含めて、内面に擦痕文の施されるもの6点がある。

原の内A・C遺跡 上記中原遺跡の南に近接する遺跡で、A遺跡では同一個体と考えられる3点の資料と、C遺跡では1点の資料を得た。前者は、昭和55年度の発掘調査による資料である（山形県教委1981）が、頸部で急に外傾する器形、やや細く鋭い2条1対の沈線と、大きな貝の切断によると考えられる直線的で大まかな腹縁圧痕文等に特徴がある。後者は、小突起が付く口縁部で、口縁に沿う浅く施された波状沈線文、斜行する結節沈線文、口唇内縁にC字状刻目文が各観察され、焼成良好で堅く緻密である。

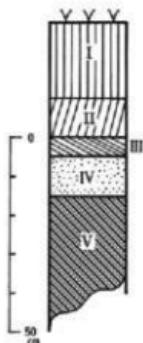
その他の遺跡では、格子目状の沈線文（第6図19）や、楕円形の刺突文（第6図21）、縄文条痕文（第6図22）、土器等を出土する袖原C遺跡、連続腹縁圧痕文・内面に浅い条痕文（第6図24）のソリメB遺跡、高畠町尼子岩陰遺跡例に近い矢羽根状の短沈線ある土器を出土した東山遺跡等他がある。なお、提示個々の資料については、表一4に概述する。

III 遺跡の概観

1 遺跡の層序

いるかい遺跡はA・B・Cの3地区よりなる。各地区とも開墾による上面の削平・擾乱が著しい。第7図は、C地区の中央西側を南北に走る農道の切り通しで観察された層序である。I～II層の厚さ、擾乱の状況を除けば、A・B地区の基本層序と大差ない。

- | | | |
|--------|--------|--------------------|
| I 層： | 黒褐色土 | (クロボク土主体の耕作土。) |
| II 層： | 暗褐色土 | (砂粒・クロボク土混じりでしまる。) |
| III 層： | 暗黄褐色砂 | (均質な砂層で5～6cmと薄い。) |
| VI 層： | バミス | (粒径10mm前後の肘折バミス。) |
| V 層： | 明褐色ローム | (粘質でかたくしまる。) |



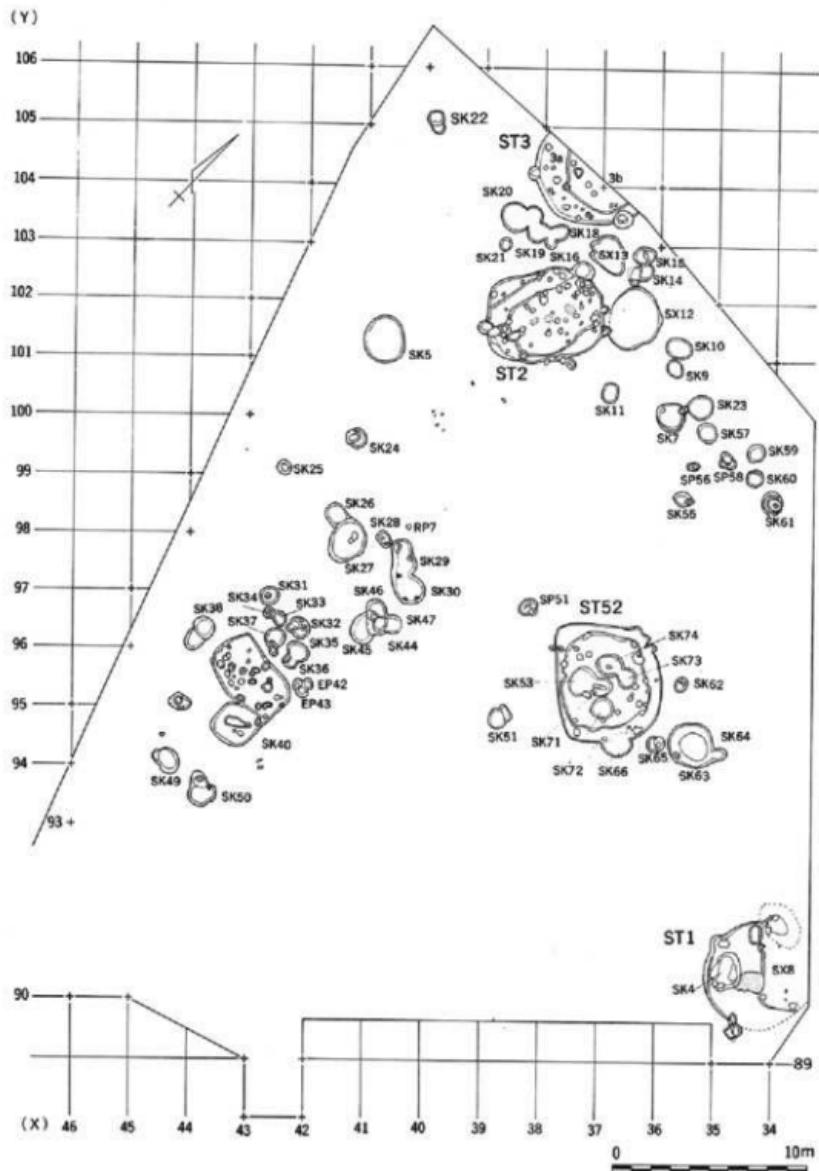
第7図 土層柱状図

遺物は、I～II層中に含まれ、所謂包含層はII層である。調査では、遺物を検出しながらII層下面～III層上面まで掘り下げ、遺構を確認している。検出遺構は、II～III層面を掘り込んでいるものと、掘り込みがIV・V層にまでおよぶものとがある。前・後者相半ばするが、土壤(フラスコ状)、ST2等が深い。覆土はII層を主体にIII～V、遺物が混じる。

2 遺構と遺物の分布

(第1次調査A～C地区) 拡張区11～18—26～35Gで大小合せて35基の小穴(S P)・土壤(SK)が検出された。そのうち、遺構番号を付けて精査した主要なものは、縄文時代中期末葉・後期初頭期を中心とする土壤群18基である(表-1・図版5下段)。その他、A地区台地の北東端の張り出し部では、中世「いるかい館」に係る溝跡(S D 2)が横断する(第3図)。空濠で区画された内部にも調査の手を加えたが、建物等遺構が認められず、時期を推測し得る遺物の出土もない。A地区での遺物は全体に少なく、遺構内でのまとまりも単一個体片若干に限られた。A地区遺構内出土の土器は、120点、石器は、剝片を含めて40点前後で、包含層内出土遺物を含めた総量でも、整理箱4、石器1箱分である。B地区では、6本の調査区に沿うトレンチを入れたが、全体に擾乱が入り、良好な遺物包含層は認められなかった。遺物も全体に僅少で、散発的な出土状況を示している。

C地区は、土取り事業の関係から変則的なトレンチの配置となり、遺跡地点の東辺・西辺にL字状の設定となった(第2図上段)。その結果、台地の西縁部のトレンチでST20とした住居跡が検出されたため、若干部分の拡張を行っている。その他の遺構では、ST20と重複するSK21土壤がある。いずれも縄文後期の所産で、住居跡では、土器埋設炉が検出された。遺物は、住居覆土を中心として分布し、整理箱1箱分の出土量がある。



第8図 造構分布図（C地区）

(第2次調査C地区) 農道の東側に張り出す台地を主対象とする地区で、約1500m²の調査面積がある。検出遺構は、下表一覧の通りで、住居跡9~10棟(切合い、重複を含む)。土壌約60基他登録遺構総数74基からなる。これらの分布を見ると、台地の縁辺に沿うST1周辺、ST52周辺、SK57周辺土壌群、ST2・3周辺の4ブロック、および台地中央部よりST39周辺、の計5ブロックがある。その他、周囲に群集しない単体で独立的に在る土壌、集石を伴う土壌(SK25・SK22)等を認める。

遺構の時期的な構成は、早期4基、前期初頭~前葉11基、前期後葉10基、後期初頭13基、その他不明となる。遺構時期の決定は、出土遺物を基礎としたが、掘り込みの浅い遺構では、上面が大部擾乱や削平を受けるため判然としないものが多い。また、遺構内からは、ST2・3等を除けば、まとまりある遺物の出土を見ていらない。全体における遺物量は、数量的な処理と集計が未了のため提示し得ないが、概略、土器17箱、石器14箱(整理箱)でそろ多くはない。これら遺物の分布は、調査時における所見から、上述遺構群とほぼ対応関係にあると考えられるが、全体的な調査区内での時期的な分布上の差・偏り等の有無の把握までには至らなかった。資料的に限られる早期の土器群については、SK20・22周辺、SK54周辺、SK25~27周辺、ST39周辺、ST49~50周辺の各地点にまとまりが認められ、いずれも集石を伴う小土壌(炉穴?)等の周辺部と捉えることができる。

表-3 第2次調査C地区検出遺構一覧

分類	検出地区(G)	時期	備考	分類	検出地区(G)	時期	備考	分類	検出地区(G)	時期	備考
ST 1	24-25-26-27	後期初期	直径6m円形	SK 26	42-99	不 明	径1.5m円形	SK 51	23-35	前期初期	円筒も含む。
ST 2	26-27-101-102	後期後葉	直径2.5mの重複	27	42-99-101	II	径2.0mの円形	ST 52	37-96	II	圓丸形
ST 3	37-39-101-102	後期初期	直径3.0mの重複	28	41-98	II	径1.5mの円形	SK 53	38-96	前期後葉	ST52を切り。
SK 4	25-26	II	ST1を切り。	29	41-98	後期初期	不整円形	# 54	25-97	早期中期	使用1回含む。
# 5	41-42-101-102	II	椭円形プラン	30	41-97-98	不 明	SK29と重複	# 55	36-99	不 明	径50cm円形
ST 6	37-102-103	前期後葉	ST2と重複	31	42-97	II	径1m円形	# 56	36-108	II	小柱穴状P区
SK 7	36-100-101	前期後葉	直径1.5m円形	32	#	後期初期	不整圓形	# 57	#	#	径60cmで浅い。
S X 8	34-91-92	II	直徑5m方形	33	#	不 明	径50cm円形	# 58	35-108	II	直徑5m円形
SK 9	36-101	不 明	門形で浅い。	34	#	II	SK33と重複	# 59	#	#	径70cm円形
# 10	36-102	後期初期	II	35	43-96-97	II	SK36と重複	# 60	33-99-100	前期後葉	フラスコ状
# 11	37-101	不 明	木構等の擾乱?	36	#	早期後葉	径50cm円形	# 61	34-25-99	II	II
S X 12	37-102-103	II	II	37	42-97	II	径1m円形	S P 62	36-96	前期初期	穴隙で深い。
SK 13	20-39-101-104	II	II	38	44-97	後 期 ?	不整圓形	SK 63	36-95	II	フ拉斯コ状
# 14	37-100	後期初期	II	39	43-44-55-97	前期初期	径2.5m	# 64	35-95	前期後葉	円形で浅い。
# 15	#	不 明	II	40	43-44-55	II	径2.5m円形	# 65	36-37-95	II	II
# 16	38-103	後期後葉	ST2Aと重複	E P 41	43-96	不 明	柱穴状小口H	# 66	37-96	前期初期	II
# 17	37-104	後期初期	ST3を切り。	42	43-96	II	II	E L 67	ST2a	前期後葉	門形
# 18	38-104	不 明	門形で浅い。	S P 43	43-96	II	II	# 68	ST2b	II	II
# 19	39-104	II	木構等の擾乱?	SK 44	43-97	後期初期	47-48-49-44	# 69	ST2c	II	II
# 20	#	II	II	45	43-42-97	II	の裏側開口が認	# 70	(ST1c?)	II	II
# 21	39-103-104	後期後葉	小円形プラン	46	43-97	II	められる。	S K 21	ST3の構造	前期初期	KS3と重複
# 22	40-105-106	早期後葉	集石遺構(例)	47	#	II	#	# 72	#	#	直径1.5mの円状
# 23	36-101	不 明	門形で浅い。	48	45-95-96	不 明	径50cm円形	# 73	#	#	上面に施土
# 24	42-106	後期初期	直径1m円形	49	44-45-95	年 月?	径1m楕円形	# 74	#	#	SK72と重複
# 25	43-108	早期後葉	集石遺構(例)	50	44-94	II	木構の擾乱?				

VI 遺構

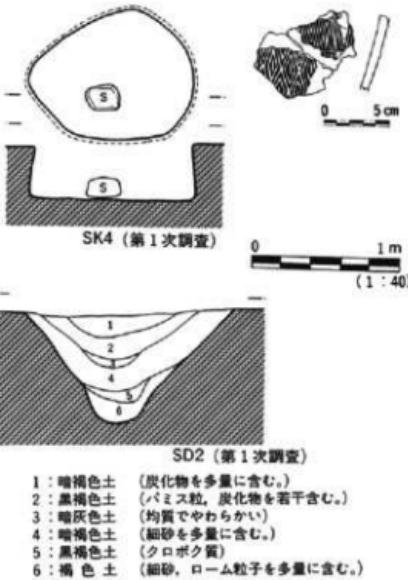
1 第1次調査A・C地区

主要な検出遺構の内、SK4, SD2, ST20について概述する。個々については紙数の都合から記述し得ないため、表一、図版5他を参照されたい。

SK4 口径88~107cmの橢円形プランを呈し、底径95~112cm、検出面からの深さ34~38cmを計るフラスコ状土壌で、壙底に、長径23cmの円礫1個を認める。覆土は、黒ボクにパミス小粒を若干含むもので、単一層と考えられた。遺物は、胎土に多量の繊維を含む日計型押型文土器、1個体4片が覆土の中~下位で検出されている（第21図1~4、第19図他）。

SD2 台地突端を画す溝跡で、地元に「いるかい〇〇守」、「見張り台」、「館」等の伝承が残っている。また、開墾前は、台地を横断する空濠状の凹部があったという。検出し得た溝跡の状況は第3図の如くで、台地突端を矩形に切断し、平坦部の面積約600m²を画す。溝の幅は、上面で140cm前後、底面で30cm前後を計り、深さは、75cm前後である。開墾による削平と埋め立てを受けたと考えられるため、往時の規模よりは、上面での幅、深さの点で大部下回ると予測される。溝断面形状はV字状を呈し、覆土の状況は第9図に示した。溝跡内部、溝跡覆土内からは、時期を推測し得る陶磁器等他の出土品は皆無である。また、掘立柱建物跡等の館に係わると考えられる遺構の検出もない。

ST20 C地区台地の西縁に位置し、長円形プランをもつ堅穴住居跡である。長径333cm、短径280cmと規模的にやや小さい。柱穴は、P₁~P₄までの計4本が検出され、埋甕炉を中心として一辺約120cm等間の略方形に配されている。壁柱穴の検出はない。各々の深さは、床面からP₁:12cm, P₂:17cm, P₃:21cm, P₄:12cmを計る。床面はほぼ平坦である。壁の立上りは、床面から12cm前後で、掘り込みは全体に浅い。炉は、埋甕炉で、50×70cmの不整円形を呈す掘り方を持つ。埋設土器（第11図2他）は、体部下半を切り取る朝顔形の深鉢で、LRとRLの短い原体を交互に施文して羽状繩文としている。また、床面に貼り付くように出土した繩文地文のみの深鉢（第11図1）や、磨石、石鎧等の出土がある。

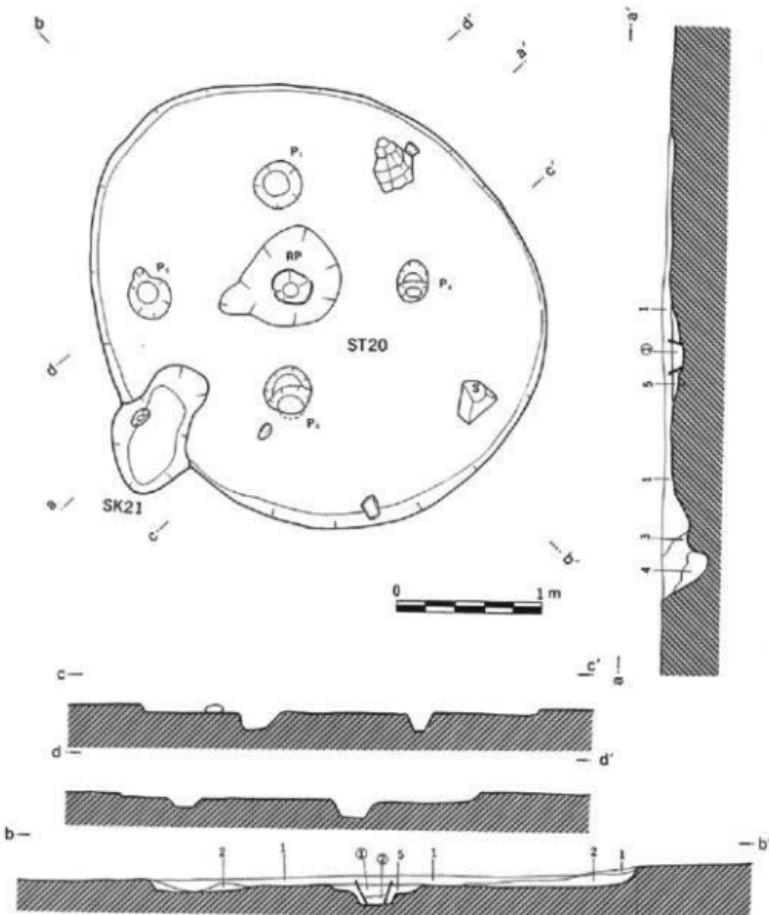


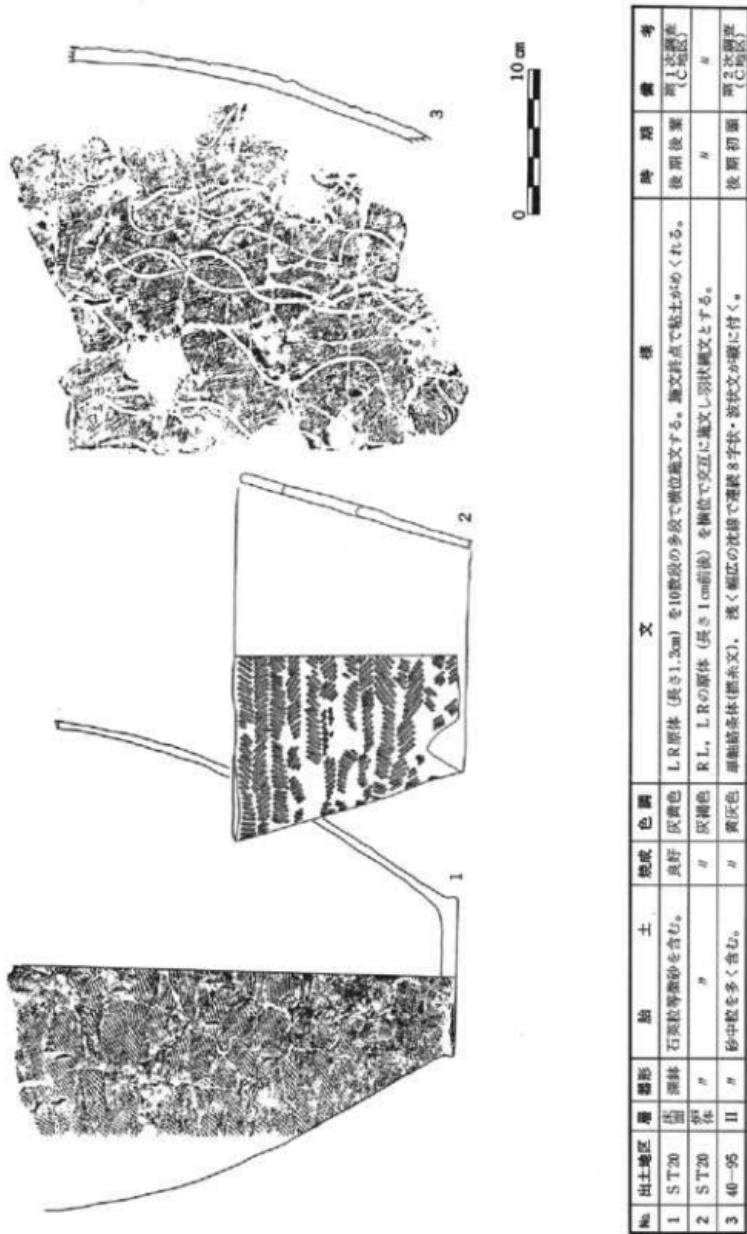
第9図 SK4・SD2（第1次調査）

SK4 (第1次調査)

SD2 (第1次調査)

- 1: 増褐色土 (炭化物を多量に含む。)
- 2: 黒褐色土 (パミス粒、炭化物を若干含む。)
- 3: 増灰色土 (均質でやわらかい。)
- 4: 増褐色土 (細砂を多量に含む。)
- 5: 黒褐色土 (クロボク質)
- 6: 楽色土 (細砂、ローム粒子を多量に含む。)





2 第2次調査C地区

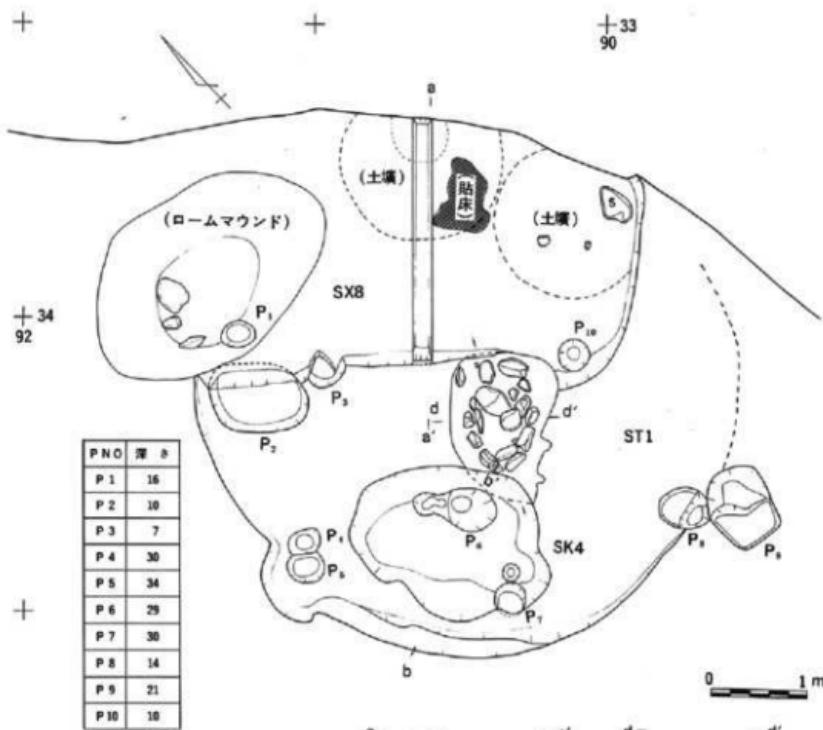
検出遺構の概要については前章で触れた。以下では、住居跡・フラスコ状土壙・集石を伴う土壙等主要なものについて概述する。

S T 1・S X 8 (第12図、図版3)

(平面形)径5.5m前後の円形プランを呈すが、北半でS X 8と重複し、さらに台地東縁の傾斜面に係ることから全形を知り得ない。また、S X 8は方形を基調としている。(壁) S T 1・S X 8ともに傾斜面を掘り込んでいるため、レベル的に高い西辺および南辺で10~20cm前後の立上りを認めた。(炉) S T 1では、ほぼ中央部分に、短径1m、長径1.5mの浅い掘り方をもつ石囲炉がある。石囲いは、大小の川原石19個からなり楕円形に配されている。しかし、礫の加熱による赤変や、底面の焼土化等不明確で、幾分疑問も残る。S X 8では未検出の土壙、ロームマウンド等と重複するためか炉と判断できる部分はない。なお、石囲炉の掘り方は、S K 4に切られている。(柱穴) P₁~P₁₀の10本がある。いずれもS T 1に伴うものと判断され、壁に沿う配列を基本としている。S X 8では未検出であった。(貼床) S X 8検出の過程で、S T 1床面レベルと同一のS X 8覆土中に貼床と思われるローム質粘土の広がりを部分的に認めた。(遺物) S T 1では、土器14点、石器(以下刻片も含む)16点がある。S X 8では、土器95点、石器23点が出土している。

S T 2 a・2 b・6 (第13図、図版2)

(平面形) いずれも方形を呈すが、少なくともS T 2 a・2 b・6の三期の重複があり、明確にその規模を把握できるものがない。全体のプランは、長軸6m、短軸4.8mの隅丸長方形となる。S T 2 a・2 bの長軸線は、N-15°-E前後、S T 6でN-30°-Eを計る。S T 6は、プランの大半をS T 2 aに切られるためその西南隅の一部分3.5m×1.5m程を検出したに止まる。S T 2 bは、プラン東南辺でやや張り出しが、長径5m前後、短径3m前後の略長方形を呈すと推定される。S T 2 aも、東側辺および東北隅が張り出して弧状を成すが、西側辺等の状況からは長径4.5m、短径4m前後の隅丸長方形を基調とすると考えられた。(壁・床) S T 2 aは、皿状の壁の立上りを見せ、全体に深い。検出面からの各住居床面までのレベルは、検出面~S T 6床面まで約10cm、S T 6床面~S T 2 a床面まで18cm、S T 2 a床面~S T 2 b床面まで18cm前後を計る。また、各住居とともに、バミス面を掘り抜き、その下面ロームを床面としている。S T 2 aとした範囲では、幾分南側全体が5cm前後低い。他については、ほぼ平坦である。(炉) S T 2 b床面に4ヶ所の地床炉を認めた(E L67~70)。これらは、そのあり方が一様ではなく、E L69~70はロームの赤変が認められるものの非常に堅く踏みしめられている。こうした事からS T 2 a:E L68、S T 2 b:E L67、の対応が考えられ、他については、上記以外の古い(拡張等も含めて)

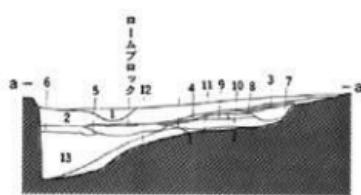


SK4 土層記述

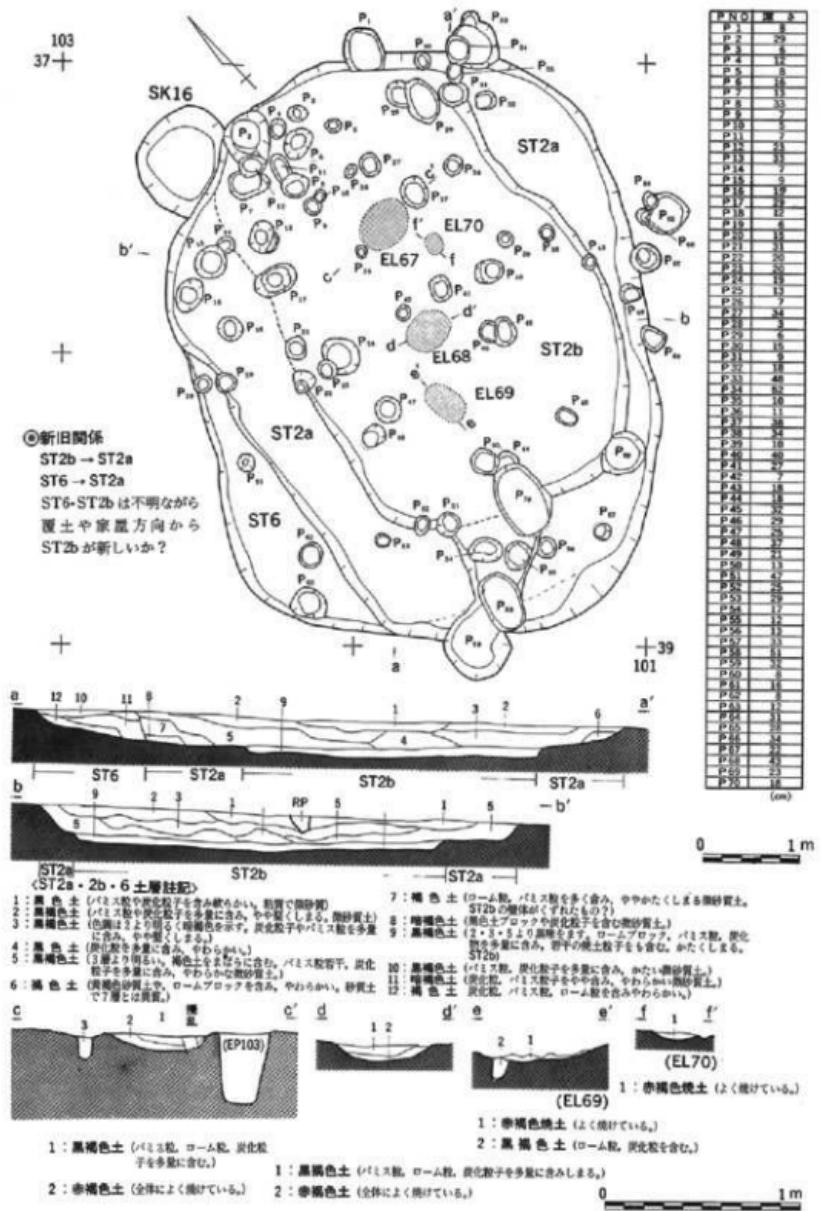
- a: ST1 覆土 (暗褐色粘砂)
- 1: 黒色 砂 (少量のミス粒、炭化物を含む。)
- 2: 増黄褐色粘砂 (ミス粒、炭化物若干を含む。)
- 3: 増黄褐色粘砂 (ミス粒を含む。)
- 4: 黒色粘質砂
- ※ 1・2は、SK4の覆土。3・4は、SK4に切られる柱穴の覆土と考えられる。

ST1・SX8 他土層記述

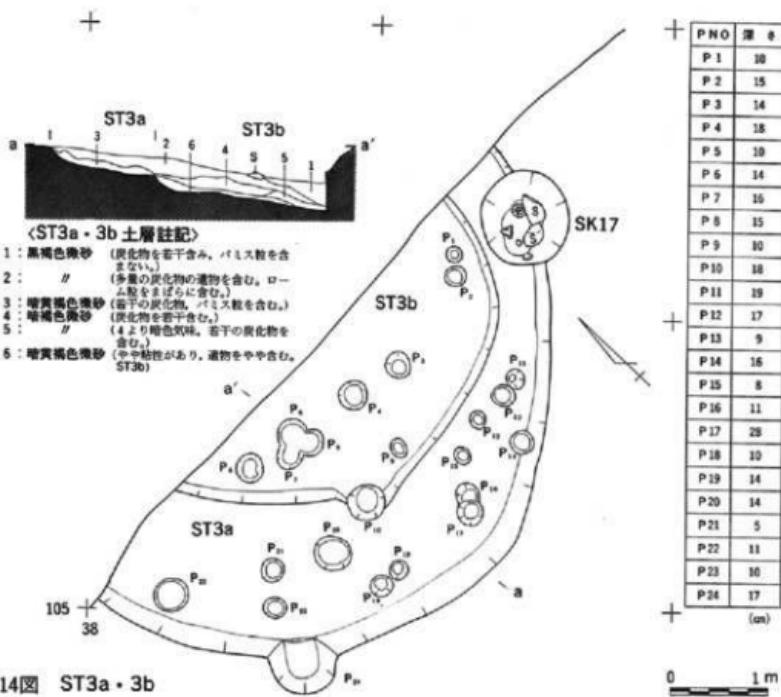
- 1: 増黄褐色帶砂
- 2: 増黄褐色粘質帶砂 (ミス粒を点々と含む。ST1の貼床?)
- 3: 増黄褐色粘質帶砂 (細粒、ローム粘土が密に入る。)
- 4: 増黄褐色粘質帶砂 (第一均質な層)
- 5: 黑色粘質帶砂 (ロームブロック、炭化物をまばらに含む。)
- 6: 増黄褐色帶砂 (微粒子)
- 7: 増黄褐色帶砂 (炭化物を含む均質な層)
- 8: 増黄褐色帶砂 (ロームブロックを含む。)
- 9: 黑色 砂 (單一で均質な土層。)
- 10: 増黄褐色帶砂
- 11: 増黄褐色帶砂 (バーグー)
- 12: 増黄褐色帶砂 (SK4土層覆土?)
- 13: 増黄褐色微砂 (SK4土層覆土?)



第12図 ST1・SK4・SX8



第13回 ST2a・2b・6



第14図 ST3a + 3b

住居跡の存在を推測させる。(柱穴) 住居内およびその周辺に70基におよぶ柱穴状の Pit が認められた。これらは各 Pit の確認面からの深さ 3 ~ 51cm を計る。S T 2 b の床面での配置からは、炉跡軸線を中心として対応する柱穴列を認める (P₃₁ : P₄₉, P₄₇ : P₄₅, P₂₃ : P₄₆, P₁₇ : P₃₇, P₁₃ : P₁₇ 等)。S T 2 a + 6 については明確でない。(遺物) S T 2 a + 2 b では、土器425点、石器177点、S T 6 では石器39点がある。時期は、S T 2 a + 2 b とともに大木5a式期、S T 6 は大木1式頃の所産であろう。

S T 3 a + 3 b (第14図、図版3)

(平面形) S T 3 a + 3 b ともにその南半部分の調査に限られたが、前者は径約 6 m、後者は径 4 m 前後の略円形を呈すものと考えられる。(壁・床) S T 3 a で 20 cm 前後、S T 3 b では 15 cm 前後の壁の立上りを認めるが、北東部程浅い。床は、ほぼ平坦でしまり、全体に北側にゆるい傾斜を見る。炉跡は未検出である。(柱穴) S T 3 a + 3 b の検出プラン内に 24 本の柱穴と思われる小 Pit がある。主要な柱穴は、いずれも壁の内側に沿う配列となっている。(重複) 土層セクション、プランの検出順序等から S T 3 b → S T 3 a → S K17 の順で新しく各遺構とともに後期初頭期と考えられる。遺物は、両住居跡で土器74点、石器128点がある。

S T39・S X40他 (第15図、図版3)

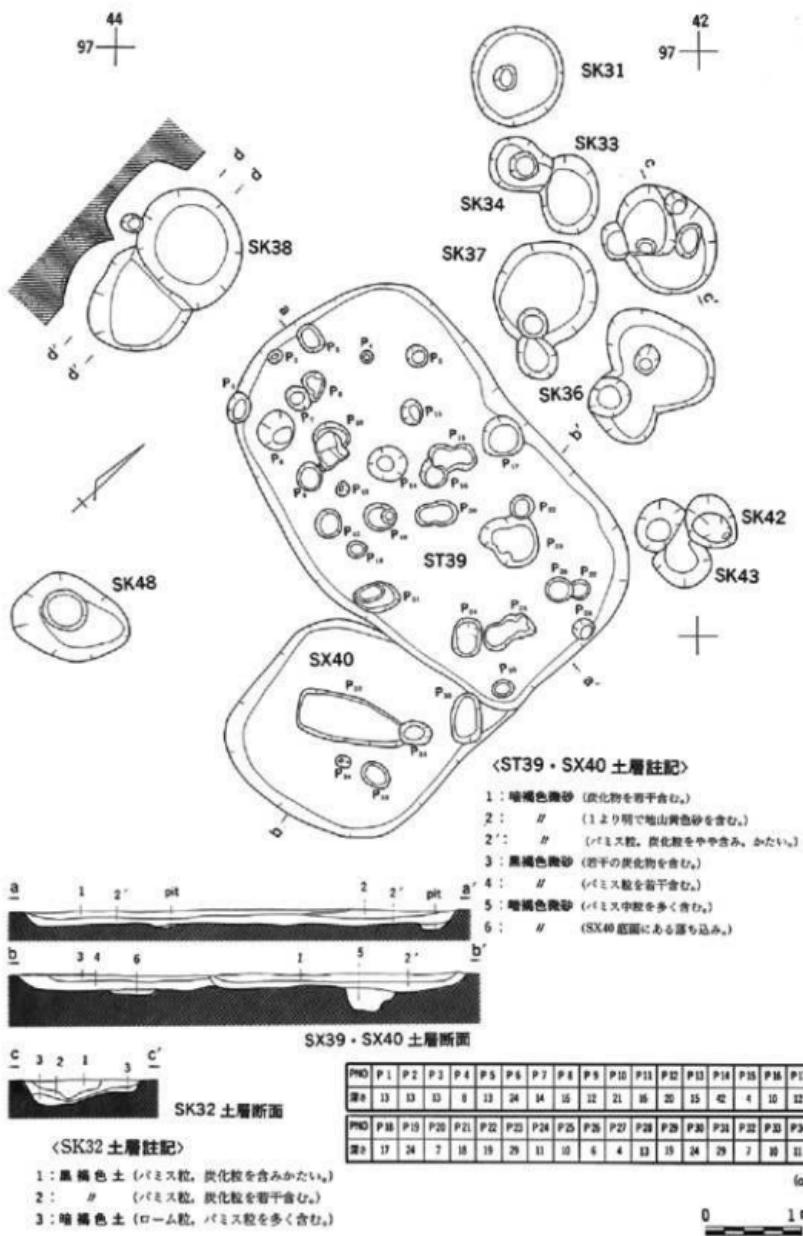
(平面形) 長径4.5m、短径2.7mの隅丸長方形で、東西にやや細長い。径2.16mの隅丸方形を示すS X40の北縁を切る。(壁・床) S T39、S X40とともにII層を壁とし、比較的浅い。いずれも18~20cmで巡る。床面は、ロームまでは達しておらず、バミス直上面を使用する。

(柱穴) S T39・S X40の床面でP₁~P₃₄までの柱穴を検出したが、整然とした配列は呈さない。柱穴自体の重複も認められ、S T39での拡張ないし建替え等も推測される。S X40では、中央部が不整で浅く落ち込み、いずれも浅い柱穴状Pit 4基を認めるのみである。

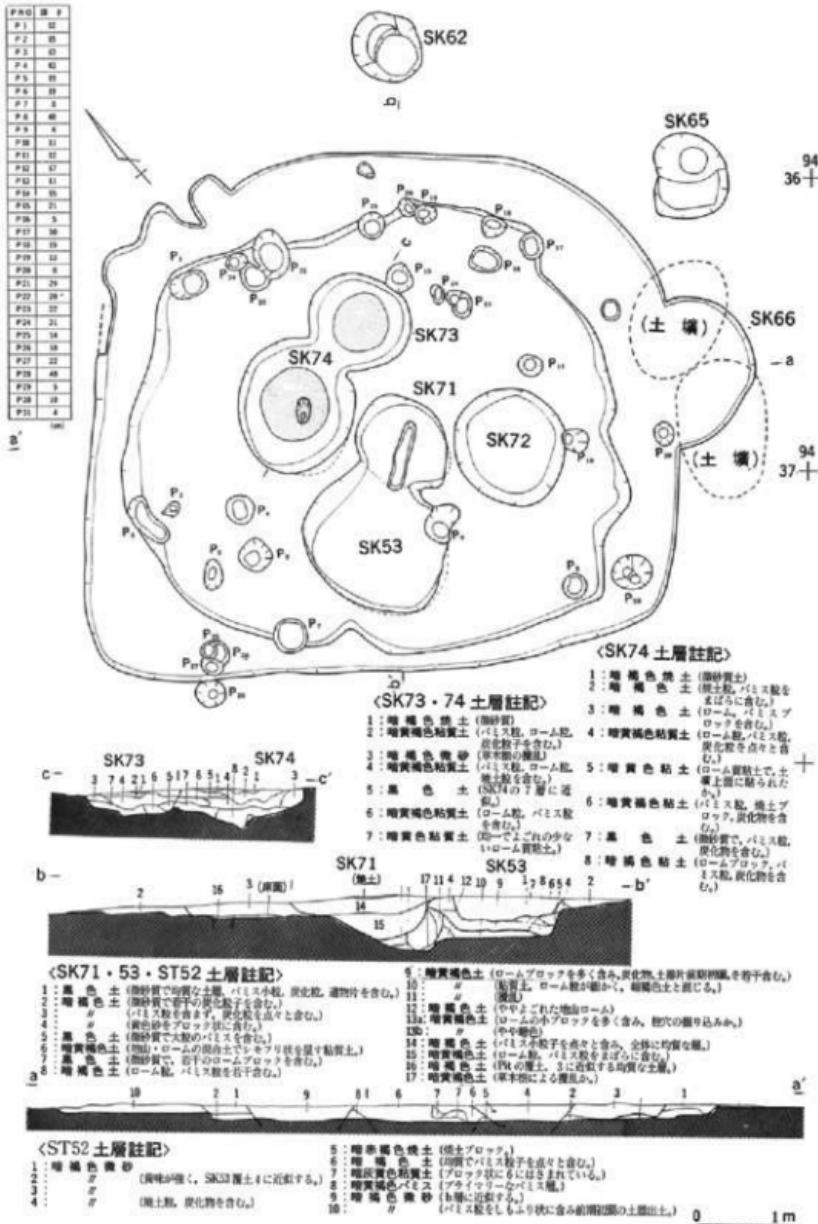
(炉) 検出されない。(堆積土) S T39、S X40は、7枚の層序よりなり、バミス粒を含む黒色土を主体に構成される。(遺物) 覆土2・2'・4層を中心に、土器11点、石器22点の出土数があり、時期的には縄文前期前葉(大木1式)のものが多い。

S T52 (第16図、図版3)

(平面形) 長径5m、短径4.5m規模の隅丸方形を基調とする。同心円状に重複し、S T52に切られる外側の略方形プランは、セクション観察や柱穴の検出状況から見て、住居跡とするには積極的判断材料に乏しい。従って遺構番号を付していない。浅い落ち込みの覆土中では、若干の前期初頭の土器が出土している。(壁・床) II層とIII層上面を壁とし、10~15cm程の床面からの高さで周巡する。立上りはやや急傾である。床は、バミス直上面の堅くしまるIII層下面を利用している。(炉) 検出プラン内の北よりに2ヶ所の焼土を認めたが、床面よりレベル的に高い覆土上面であり、それ自体はSK73・74に係わっている。SK71の覆土上面でも薄く若干の範囲に焼土を認めるが、いずれもS T52より新しい時期のものと判断される。しかし、住居埋没間もない時期に、土壤が連続的に構築されて、床面や炉跡を擾乱したとして、その擾乱や掘り土が再堆積した状況とも考えられない事はない。いずれにしろ、結果的に重複のため破壊されたと考えられ、明確でない。(柱穴) プラン内壁ぎわ、および近接する外周縁部を中心にP₁~P₃₁が認められた。その配置と規模からP₄、P₈、P₂₁、P₂₄とP₂、P₉、P₁₃、P₁₄、P₁₅、P₁₈、P₂₂、P₂₃等が主要なものであり、主柱穴的なものと壁柱穴的なものとから構成されたと考えられる。これら柱穴は、重複や位置の近接が認められ、少なくとも建て替え等が1度以上は行われた可能性が強い。(遺物) プラン覆土内からは、土器91点、石器47点の出土があり、縄文前期前葉が主体を占める。また床面直上出土のものは、土器7点、石器5点であった。(重複他) プラン検出順序、セクションの観察からSK53、71~74の5基の土壤とともにST52より新しく、各土壤間では、SK74→SK73、SK53→SK71となる。これら土壤は、規則的にややSK53が大きいものの、径1~1.5mの円形プランを基本とし、オーバーハング状の壁の立上りを認めないSK72・73についても本来的にはフラスコ状であったと考えられる。時期は縄文前期前葉である。



第15図 ST39・SX40他



第16図 ST52・SK53・71~74他

S K 22 (第17図上段右, 図版4)

長径122cm, 短径86cm, 深さ25cmを計り, 重複状の小判形を呈す。一段深い径85cm前後の円形の落ち込みでは大小の焼疊7個が詰り, やや大きい扁平疊が底面にのる。覆土は, パミス粒の混る暗褐色土の單一層である。遺物は, 野島式併行の土器片(第23図11)他若干があり, 繩文早期後葉期の炉穴と考えられる。

S K 25 (第17図右下)

径76cmの円形プランで, 深さ20cmを計る。壁の立上りは東でゆるく, 西側で急傾する。底面から10cm前後浮いた覆土中に3個の扁平疊があり, 加熱を受ける。覆土は, 暗褐色のパミス小粒が混じる單一層で野島式併行の土器(第23図1)他早期後葉の土器若干が出土した。炉穴と考えられ, 周辺では, まとまりある早期の土器の分布を認める。

S K 51 (第17図中段右, 図版4)

径104cmの略円形を呈すフラスコ状土壤(S K51a)を, 円疊を伴う小形の土壤(S K51b)が切る。覆土はいずれも黒ボクにパミス小粒が混じるもので, 遺物は両者で4点の土器片があるにすぎない。時期は, 前期前葉期と推測される。

S K 59 (第17図上段左, 図版5)

径1m弱の略円形を呈すタライ状の土壤で, 壁が急傾して立上る。堆積土の状況からは, フラスコないし袋状であった可能性がある。遺物は, 前期前葉を主体とし(図版16, 5~7), 若干の前期後葉のものが混じる。

S K 60 (第17図中段左, 図版4)

口径90cm, 底径80cm, 深さ45cmを計るフラスコ状の土壤で, 堆積土全体に炭化物を多く含む。遺物は, 土器8点があり, 前期後葉, 中期中葉, 後期初頭のものが混在する。

S K 61 (第17図下段左, 図版4)

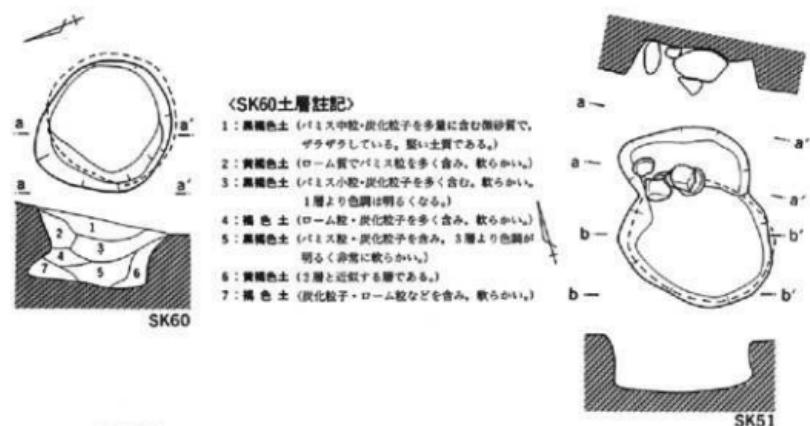
口径100~114cmの略円形プランを持ち, 壁中央径65cm, 底径82cmを計るフラスコ状土壤である。深さ84cmと深い。遺物は, 前期後葉を主体とする5点が出土している。

S K 5 (第18図上段左, 図版3)

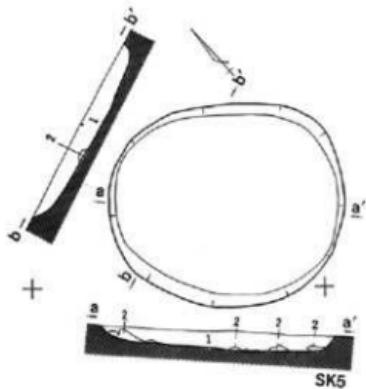
長径243cm, 短径207cm, 深さ15~20cmを計る椭円形の土壤で, 規模的に大きい。覆土は, 黒ボクを主体とし, 遺物は後期初頭と思われる土器片若干を含むのみである。

S K 7 (第18図下段右, 図版3)

径145~150cmの略円形で, 深さ42cmを計る。壁は, ゆるく湾曲しながら立上り部分的に段が付く。覆土は, 炭化物を全体に多く含む。遺物は, 前期後葉を主体とする土器13点がある。これらには, 若干の前期初頭(図版15, 60)他の資料が混じる。石器は5点の出土数があった。

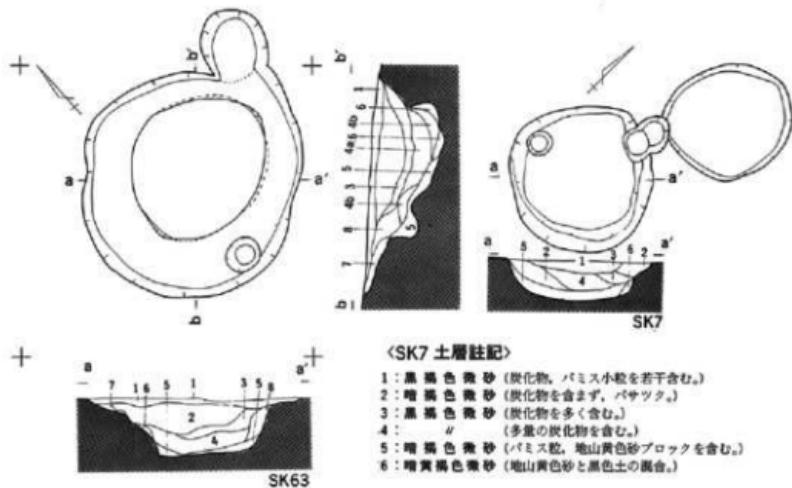


第17図 SK22・25・51・59~61



〈SK5 土層註記〉

- 1: 黒褐色 砂 (バミスの小粒を点々と多く含む。)
- 2: 明褐色 砂 (やや粗い砂質土で、地山のブロック。)



第18図 SK5・7・63

S K 63 (第18図下段左、図版 5)

長径230cm、短径218cm、深さ75cmを計る大型のフラスコ状土壙である。壁中央径は、最大値135cm、底径100~145cmを各計る。覆土は、図示の通りであるが、中位~壙底面にかけては、側壁をなしたと思われるローム質粘土層の堆積が主体を成す。これらは、土壙の埋没過程で、オーバーハングする壁の大部分が崩落したために起った現象と考えられる。

遺物は、壙底面より若干上部にある4層中に多く認める事ができ、土器24点、石器16点の出土数がある。土器は、前期前葉期のものが大半で、土壙の時期もこの頃に求められる。

V 遺 物

1 土 器

本遺跡より出土した土器は、縄文時代早期～弥生時代中期にまでおよぶ多様なものがある。量的な比率では、前期前葉・後葉が多く、後期→早期→中期→弥生の順となる。以下では、時期毎に群に分け、さらに胎土・焼成、施文技法・文様モチーフ、文様要素の組合せ等から類別し概述する。拓影図で提示し得た資料については、章末に観察一覧表とし、基礎的事項の記載に努めた。

第1群土器（縄文時代早期）

1類 押型文土器（第19図、第21図1～4、図版9-1～5）

重層山形文・重層菱形文を同一器面に施文する体部片（第19図）の他、重層山形文のみを認める小破片6点がある。いずれも胎土中に多量の纖維を含み、器内面の整形が緻密で平滑に仕上げられている。第1次調査A地区SK3（2点）、同SK4（4点）、同地区表面採集1点の計2個体7点に限られるが、平行線状文以外の異なる二種の原体を同一器面に施文する例は注目される。重層山形文の1単位幅1.9cm、同菱形文1.2cm長さ2.9cmを計る。

2類 沈線文土器（第21図10・11、図版9-11.12）

a：沈線文+列点文（第21図11） b：細い一本沈線文（第21図10）の2種がある。

3類 沈線文+連続押引文（結節沈線文）土器（第21図5～8、図版9-6～9）

a：沈線文+逆「コ」の字形押引文（第21図5・6） b：沈線文+「<<」字形連続押引文（第21図7） c：短沈線（矢羽根状）+「<<」字形連続押引文+口唇部刻目文（第21図8）

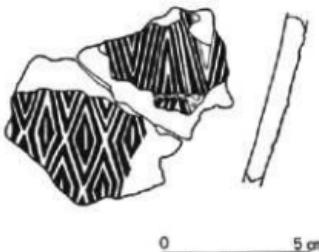
4類 結節沈線文+貝殻腹縁圧痕文土器（第21図9・17・20～24・31他、図版9-10他）

a：「<<」字形連続押引文+貝殻腹縁圧痕文+口唇部刻目文、小円形刺突文を有するものがある（第21図9・20・22）。b：結節沈線文（棒状工具）+貝殻腹縁圧痕文+小円形刺突文、口唇の内側縁に腹縁圧痕文の付くものがある（第21図17・21・23・24）。

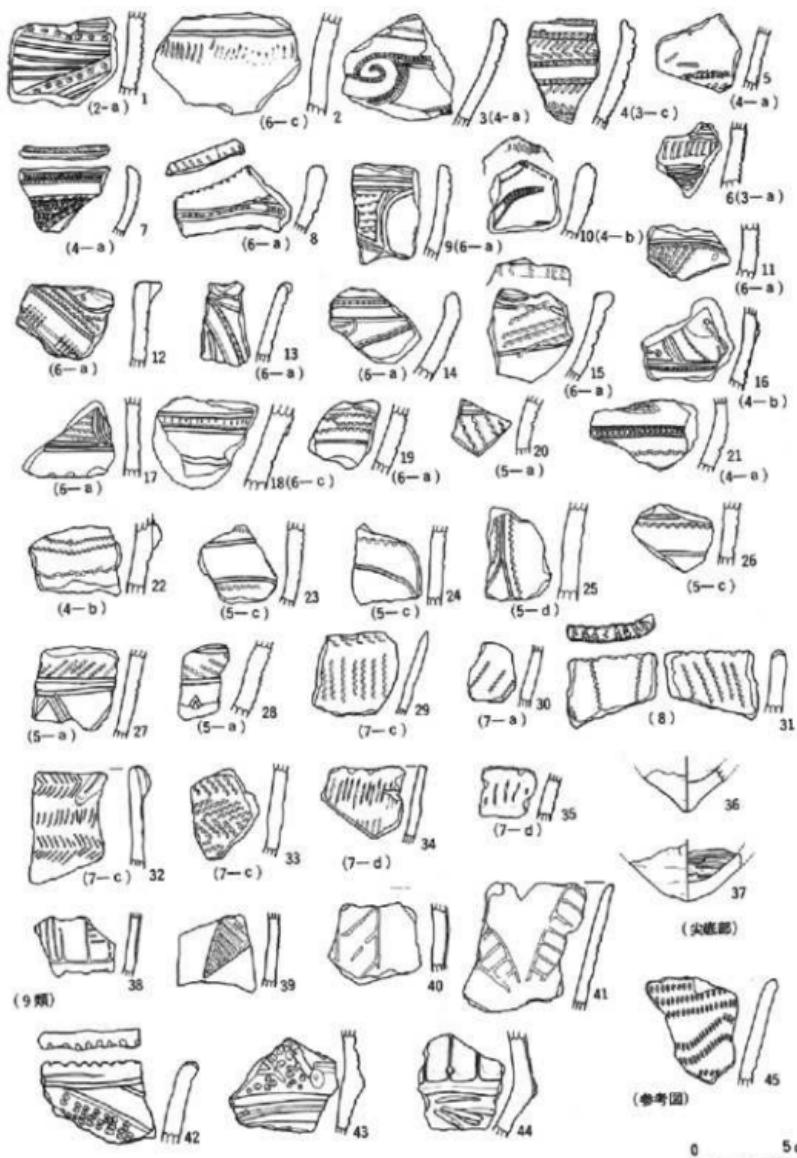
c：結節沈線文（棒状工具）+貝殻腹縁圧痕文、腹縁圧痕文が沈線に平行して沿うもの、斜行並列で沿うもの、平行する刺痕列を伴うもの等多様である。結節沈線文は、D字状連続文を呈すものが多い（第21図29・31、第22図1）。d：結節沈線文（棒状工具）、結節はそれ程顕著でない。器壁がやや薄く、器内外面の調整が良く緻密である（第21図33・34）。

5類 沈線文+貝殻腹縁圧痕文土器（第21図14・15、第22図2～8・18、図版10-1他）

a：沈線の上部に斜行並列する貝殻腹縁圧痕文（第21図14・15）。b：浅くやや幅広の沈



第19図 押型文土器



第20図 土器実測図(2)

5・9・13・15・20・29・33・35・37：鶴子中原遺跡 45：山形市にひゃく寺遺跡(その他のいろかい遺跡出土)

線に斜行並列して沿う貝殻腹縁圧痕文(第22図16)。C：横走する大ぶりな一本沈線の区画線内部に平行して沿う貝殻腹縁圧痕文(第22図2～8)。d：縦位の細沈線に沿う貝殻腹縁圧痕文(第22図18)等に細分される。

6類 細沈線文+短条痕文+貝殻腹縁圧痕文土器 (第21図12・13・16・18・19・25他)

a：細目の沈線+短条痕文+貝殻腹縁圧痕充填文+口唇部刻目文等の文様構成を持つものを一括した。その他の文様では、小円形刺突文、口唇部小突起、区画内短条痕文充填等がある。口縁に沿う2条平行の区画線間は、若干隆起するもの(第21図16・18・19・32)が多い。貝殻腹縁圧痕文は、細沈線に平行して直線的に沿う。沈線の区画(三角形主体)内では、区画線に沿いながら横位重層を基本とし、中にレンズ状の区画内を縦位充填するもの(第21図26)がある。短条痕文は、平行沈線の施文後、狭い隆起部分に直交する形で限定的に施されるものと、隆起が弱く、条痕が平行沈線の枠外に出るもの(第21図25・32)等がある。口唇部内縁の刻目は、ヘラ状工具や半截竹管状工具(第21図25)で施され、貝殻腹縁圧痕文はない。b：横走する沈線+波状沈線文+区画線に沿う極めて短い条痕文状の連続文(第21図12・13)で文様が構成される。1個体3点に限られる。c：平行沈線文+波状沈線文+縦位並列連続波状(爪形?)圧痕文等で文様が構成される。器面を縦に調整する整形痕、平行沈線間隆起部に縦位連続で施文する細沈線(条痕文?)が特徴的である。全体に器壁が厚い(第21図35、第22図10)。同一個体3点に限られる。

d：V字状重層沈線文+貝殻腹縁圧痕文+口唇部刻目文(第21図30)で文様が構成される。貝殻腹縁圧痕文は、一間隔置きに施されている。

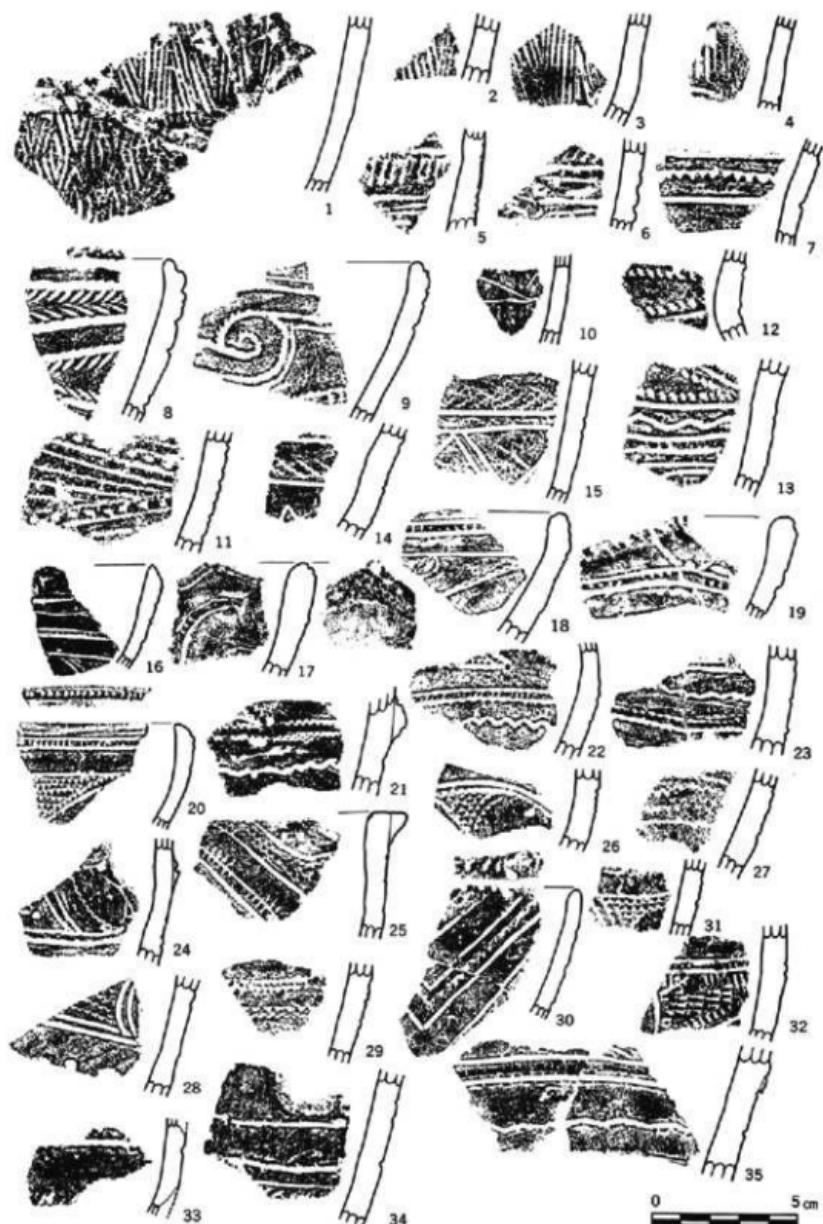
7類 貝殻腹縁圧痕文土器 (第22図11～15・17・19・20)

a：貝殻腹縁圧痕文がやや間隔を置いて縦位並列に施され、他の文様要素を認めない(第22図9・14・15)。b：連続波状貝殻腹縁圧痕文が多段で施され、裏面に浅い擦痕なし条痕文が付く(第22図19)。c：口唇部に腹縁圧痕文が付き、口線上端部に腹縁圧痕文を伴う斜行隆起文をもつ(第22図17)。文様は体部上半に限られるらしく、短い貝殻腹縁圧痕を連続的に用いた羽状、縦位並列、羽状と多段横位の施文を見る。上端部の羽状圧痕上には、朱等の塗彩が文様に沿って施されている。内面には、横位の擦痕文を認める。

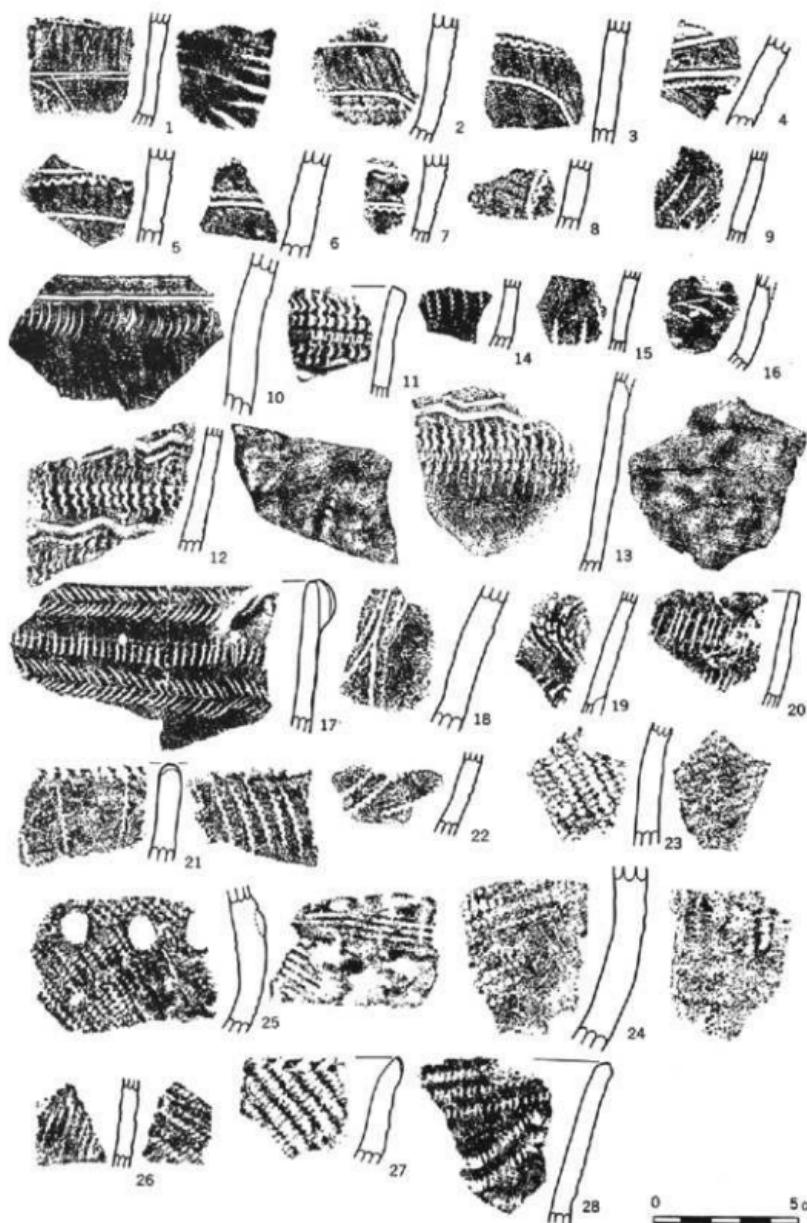
d：ギザの弱い直線的な貝殻腹縁圧痕文が縦位並列の多段で施され、平坦な口唇に条痕が付く。内面は無文である(第22図20)。e：横走する波状沈線+連続波状貝殻腹縁圧痕文が施されるもので、平坦な口唇部に横走する条痕文が付される。内面には、浅い条痕文を認める(第22図11～13、同一個体)。黒色を呈し、石英細粒を含む胎土が特徴的である。

8類 貝殻腹縁圧痕文土器 (第22図21・22)

貝殻腹縁圧痕文を主体とするものであるが7類と異なりその施文が独立的である。口唇



第21図 土器拓影図（2）



第22図 土器拓影図（3）

部、口縁部上半、口縁内面上端部に貝殻腹縁圧痕文が施される（第22図21）他、同一個体の体部上半部片と思われる2点の資料がある。器壁がやや厚く、胎土的にも7類と異なる。

9類 微隆起線による幾可学的文様構成をもつものを一括する。（第23図1～16・18）

野島式に併行する一群と考えられるもので、器面の内外面ともに斜行する条痕文を施すものが多いため、まれに無文様のものもある。文様は、細い粘土紐の両側に調整を加えて断面三角形状とし、木の葉ないしレンズ状の区画内部にハシゴ状に充填するもの（第23図1他）や、横走する隆起線から垂直に上るハシゴ状の構成を見せるもの（第23図18）等の別がある。しかし、全体に小片の資料であり文様構成の一端を窺い知り得たのみである。

区画内部に充填される粘土紐では、一端の手前から更に斜行する貼付を加えて鋸歯状の文様を描くものがある（第23図4・8・12～14）。口縁は、外傾しながら薄くなる単純口縁を示すものが大半を占める。胎土には纖維を含むものと含まないものがあり、後者がやや多い。また、色調では前者が暗灰色系、後者は明褐色系と異なっている。

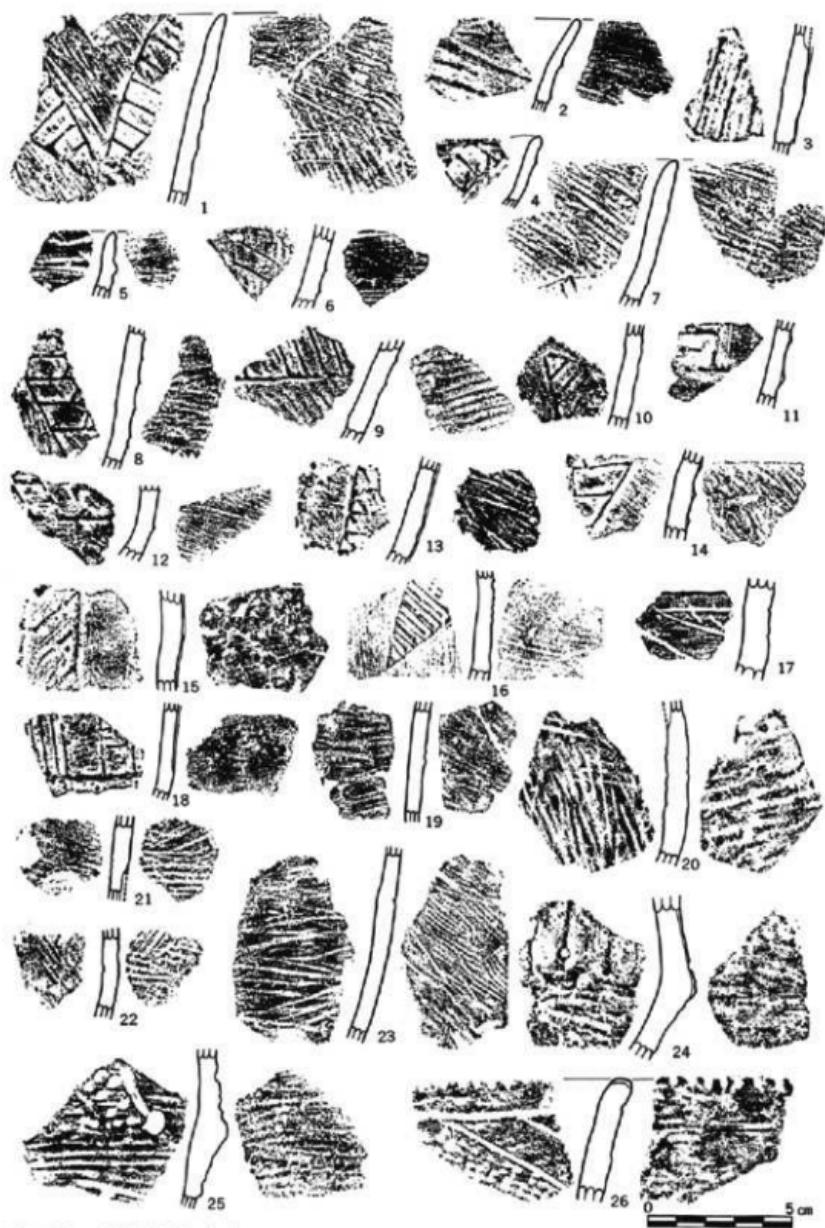
10類 沈線文+結節沈線文（条痕地文）で文様の構成されるもの（第23図17）。

沈線および結節沈線文で三角形状の区画を作り、内部に結節沈線による斜行並列文を充填する。内面は無文で、器壁がやや厚い。楓木下層式とされる資料の一部に類似すると考えられるが、施文具で異なる。纖維の混入は認められない。

11類 沈線区画内を半截竹管様工具で充填するものを主体とし、粗雑な条痕文を地文とする一群を一括する。胎土には、石英中粒砂や纖維を多く含んでいる（第23図24～26）。施文技法からは、a：微隆起線+小円形刺突文（第23図24）、b：沈線区画（円錐形刺突文を伴う）+半截竹管の刺突充填文（第23図25・26）の二種に細別できる。第23図24・25は、上半に文様帶、下半に条痕地文を認め、逆「く」字状の段を有す。いずれも内面には横位方向に施される粗大な貝殻条痕文を持つ。鶴が島台式に併行する一群と考えられる。

12類 繩文条痕文・条痕繩文・繩文等の文様をもつ早期末葉期の土器群を一括する（第22図23～26）。繩文条痕文土器では、指頭圧痕による円形凹文をもつ（第22図25）。第22図27は、口唇に刻目を斜に入れ、地文（0段多条、羽状繩文？）を横位に施すもので前期初頭上川名II式に併行する。上記類別からは除外すべき後続するものである。

13類 体部地文（条痕条痕・無文条痕・無文無文）のみの破片資料の一群を一括する（第23図19～23他）。胎土や焼成、色調などから、条痕条痕の大半は10類及び一部11類、無文条痕は10類ないしは7類、無文無文は、大方5・6類に帰属すべきものと考えられる。器内外面ともに条痕文とする一群の中には、条痕が貝殻によるものではなく、絡条体を用いたと考えられるもの（第23図20？・23）を含んでいる。県内における子母口式併行土器（第22図28、これまでの唯一例）の分布、様相を探る上で重要な視点となろう。

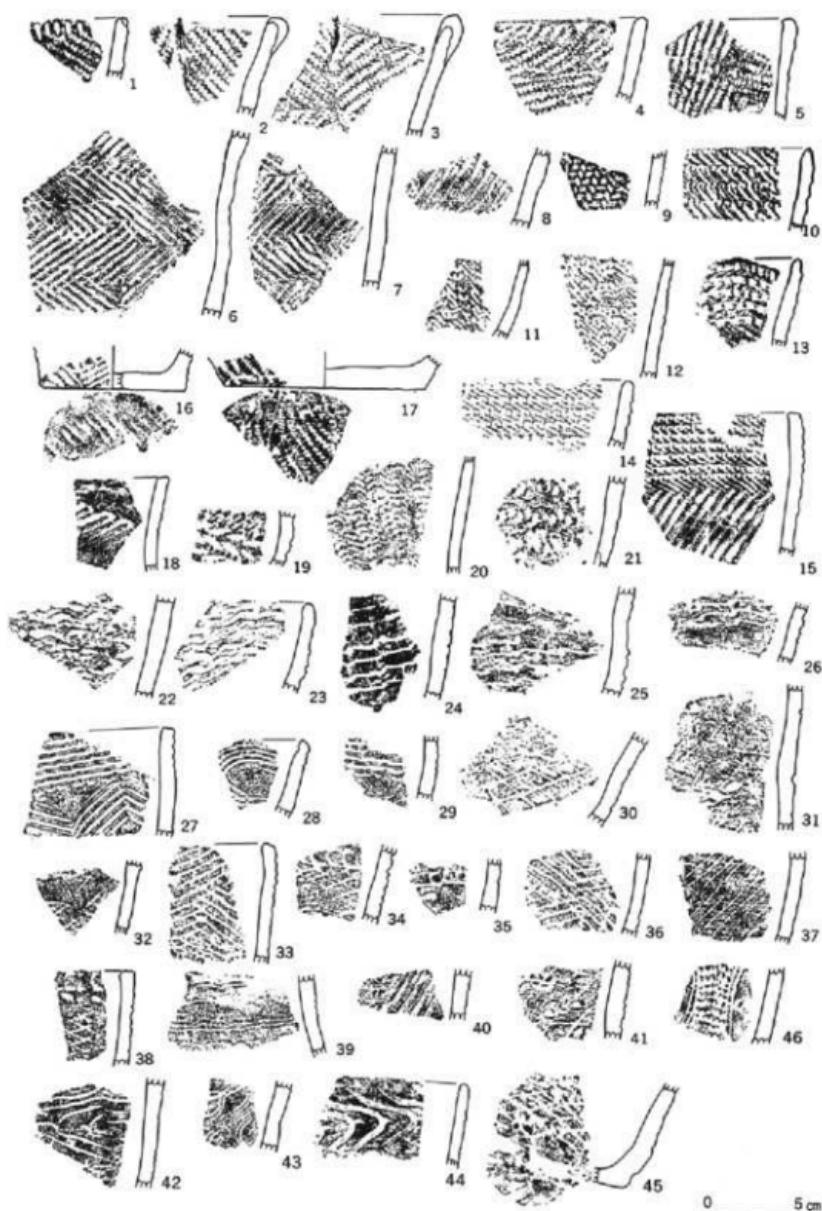


第23図 土器拓影図 (4)

第II群土器（縄文時代前期）（第24図、図版12）

1類 口唇に刻目が付き直下にR L 斜行繩文（羽状繩文？）が付くもの（第22図27、第24図1）。2類 羽状繩文の施されるもの（第24図2・3・6・7・16・17・21）で、a：結束のあるもの（第24図21）とb：非結束のものとがあり、bが大半を占める。3類 斜行繩文の施されるもの（第24図5・8・18、4は胎土や焼成から後期か）。4類 組紐文の施されるもの（第24図9）。右巻L L・左巻R Rの原体を用いる1点に限られる。5類 ループ文の施されるもの（第24図11・12・14・15・19・20）。a：口線上端に多段で施されるもの（第24図14・15）、b：側面環付繩文による変形ループ文となるもの（第24図11・12・20），c：捺りの異なる原体を交互に押捺施文する捺糸圧痕文を伴うもの（第24図19）の三種がある。6類 摺糸文（単輪絡条件）の施されるもの。a：不整捺糸文（第24図22・23）。b：葺瓦状捺糸文（第24図24～26・39）。c：網目状捺糸文（第24図30～34・37・38・41・45）。これには、半截竹管によるC字状の爪形文を伴うものがある（第24図34・35？・38）。d：木目状捺糸文（第24図36・40・42～44）。7類 沈線文の施されるもの（第24図13・27～29）。a：半截竹管による2本同時施文を2～3回行い、所謂櫛齒状の文様を描くもの（第24図27～29）。b：半截竹管で区画し、内部を押引状の連続刺突文で充填するもの（第24図46）。c：ヘラ状工具を用いて有筋沈線とし、多段で横位施文するもの（第24図13）。地文にR L横位施文の斜行繩文が付く。d：半截竹管による平行沈線間を、C字形の爪形文で充填するもの（第25図25）。8類 口縁に沿う刻目の付く粘土紐・二段で横位に巡る半截竹管刺突文、体部上半～下半？にわたるS字状連鎖沈文をもつもの（第25図23）。1点に限られる。

9類 粘土紐貼付文の施されるものを一括する（第25図1～21・33）。これらは、器形や施文の細い技法、文様構成などの諸点から細分される。a：屈曲の少ない深鉢で単純口縁を有し、繩文ないし捺糸地文上に細い粘土紐貼付による2条1单位を主とする山形文をもつもの（第25図1～10・13）。b：体部が球形に張る所謂金魚鉢形の器形を有し、粘土紐による山形文、平行文+連弧文、菱形文、棒状並行文等が主に体部上半～口縁部にかけて施文されるもの（第25図11・12・17・19～21・33）。c：鋸齒状の隆帯や、作り出しによる鋸齒状口縁をもつもので、頸部に粘土紐貼付文（山形文、小円形竹管文を伴う平行文）を巡らすもの（第25図14・15・18）と半截竹管による平行沈線や爪形文をもつもの（第25図16）がある。10類 隆帯を口縁に巡らして小山形波状文とし、頸部に半截竹管による斜位からの連続刺突文を4段以上巡らすもの（第25図22）。11類 沈線で鋸齒状文や三角文等を描くもの（第25図26・27）。12類、無文で輪積痕を明瞭に残すもの（第25図28・29）。13類 体部地文（繩文・捺糸文）のみのものを一括する（第25図30～32）。



第24図 土器拓影図 (5)



第25図土器拓影図（6）

表-4 各土土壤觀察表

第III群土器（縄文時代中期）（図版15上段，1～7・14他）

包含層および遺構覆土内から若干の大木7b～8a・10式に併行する土器群が出土している。類別して説明を加えるだけの資料的まとまりを欠くが、口縁部を中心に撫糸圧痕文を弧状に配するものや、隆帯や隆線と組合さるもの等がある。その他、A地区SK10内から、大木10式でも比較的新しい段階と考えられる隆起線意匠をもつものが出土した。

第IV群土器（縄文時代後期）（図版13, 1～17, 19～23）

撫糸地文と沈線、沈線区画内磨消繩文（図版13, 2）等をもつ後期初頭期（宮戸1b式）に比定される一群と、時期的に近接すると考えられる内面に単目状の平行沈線や格子目文をもつ一群がある。これらの他、若干の掘之内I式、加曾利B I式、新地II（コブ付土器）式等に比定される一群が認められている（図版15～17, 19～23）。第1次調査で検出されたS T20の炉体土器や床面出土の土器は、全面に羽状繩文や斜行繩文を施す深鉢形の粗製土器で、後期後葉期の所産と考えられる（第11図1・2）。

第V群土器（弥生時代中期）（図版13, 18?・24・25）

口縁が短く外反し、頸部でややしまる深鉢形土器（図版13, 24・25）2個体2片、壺形土器と考えられる体部上半～頸部にかけての1個体3点（図版13・18）がある。前者は、頸部に列点文、後者は磨消繩文をもつ。楔形圓式前後と考えられるが定かでない。

2 石 器・石製品（図版16～18）

以上の記述の如く、本遺跡から出土した土器群は、縄文時代早期から弥生時代中期にわたる。すなわち、遺跡域内に残された遺物は、それだけの時間幅をもつ事となり、石器群の編年的位置付けは極めて困難であると言わねばならない。また、本報告では、出土石器群を網羅的に取り上げて類別し、分析および解説し得る事が遺憾ながら不可能であったため、別途機会にその責を果す事を約束してご寛容を願いたい。以下、出土石器群の概要を記し、不充分ながらその代表例を図版中に掲載するに止める。

打製石器では、石鎌（13点）、石錐（5点）、石匙（8点）、搔・削器（29点）、笠状石器（57点）がある。磨製石器では、磨製石斧（6点）、砾石器では磨石（34点）、凹石（109点）、石皿（2点）があった。石製品は、磨製の円盤状石製品（2点）、打製の円盤状石製品（1点）、玦状耳飾り1点（残存長6.4cm、最大幅2.2cm、厚さ0.6cm、重さ11.3g）（図版17, 31）となる。これらの器種と数量比から見れば、笠状石器、凹石、磨石類の比重がかなり高い。むろん時期的、形態・機能の分析および数量的構成の把握等一連の手続きを踏んでいないが、山野における植物質食料の採集に重点が置かれたものと推測される。時期的な判別が困難である事は、先にも記した。さらに諸分析が未完の現在言を控えるべきであるが、形態的特徴からは、それらの多くは縄文時代前期に属するものと考えている。

IVまとめ

1 出土土器について

本遺跡出土土器は、縄文早期の押型文土器、沈線文系土器、貝殻沈線文系土器他早期全般、縄文前期初頭～前葉、同後葉、縄文中期、縄文後期、弥生中期といった広範でかつ多岐にわたる内容を含む。特に、押型文土器をはじめとする早期の一群は、これまでの山形県内においては、資料的に極めて限られていただけに注目されるが、層位等による把握他客観的査証は得ていない。何らかの（多くは屋外炉か）遺構を中心とする数ヶ所の集中地点（ブロック）を指摘し得るのみである。表-5は、文様を中心とする分類で得られた早

表-5 縄文早期の土器類別一覧

分類	文様構成	拂因番号	縄文期(?)	縄文例	型式
1	重層山形文+重層菱形文（日計型押型文）	第19図・第21図1～4	(+)	森岡山北Ⅰ 口向	日計
2 a	沈線文+列点文	第21図11	(-)	赤石？ 山ノ内Ⅰ？	田戸上層
b	細い一本線文	第21図10	(-)		#
a	逆「コ」の字形連続押引文+沈線文	第21図5・6	(-)	森岡山北Ⅱ頃の 一部	明神裏田
3 b	沈線文+「くく」字形連続押引文	第21図7	(-)		#
c	短沈線文（矢羽根状）+「くく」字形連続押引文	第21図8	(-)	尼子岩陰	#
a	「くく」字形連続押引文+貝殻腹縫圧痕文+口唇部刻目	第21図9・20・22	(-)		# ?
4 b	結節沈線文+貝殻腹縫圧痕文+小円形刺突文	第21図17・21・23・24	(-)		# ?
c	# #	第21図29・31、第22図1	(-)	大畠山	# ?
d	# (縄沈線で結節がそれ程顯著でない)	第21図33・34	(-)		# ?
a	沈線文+斜行貝殻腹縫圧痕文	第21図14・15	(-)		田戸上層
5 b	# (浅く幅がやや広い)+斜行貝殻腹縫圧痕文	第22図16	(-)		#
c	沈線文+平行貝殻腹縫圧痕文	第22図2～8	(-)	細野Ⅰ、黒木沢 A、弓張平A	#
a	縄沈線+短条文+貝殻腹縫圧痕文+口唇部刻目文	第21図16・18・19・25・26・32	(-)	山ノ内Ⅱa # II b	物見台 手取(13)
6 b	波紋文+波状沈線文+短条文	第21図12・13	(-)		#
c	平行沈線文+波紋文+凝灰鉄連続波状条痕圧痕文	第21図35、第22図10	(-)		#
d	「V」字状連続沈線文+貝殻腹縫圧痕文+口唇部刻目文	第21図30	(-)		#
e	貝殻腹縫圧痕文（巣位並列、口縫部に2～3段）	第22図9・14・15	(-)	山ノ内Ⅱc 八幡原No.24	大寺上層
b	連続波状貝殻腹縫圧痕文（多段）	第22図19	(-)	大畠山田Ⅱa # III b	#
c	羽状・巣位並列・羽状の貝殻腹縫圧痕文	第22図17	(-)		#
d	ギザの溝（直線的）貝殻腹縫圧痕文（巣位多段）	第22図20	(-)		#
e	波状沈線文+連続波状貝殻腹縫圧痕文	第22図11～13	(-)		#
f	貝殻腹縫圧痕文+土器（他の要素を含まない）	第22図21・22	(-)	麻石IIと似る	物見台？
g	微隆起線文（内外両条痕地文が多い）	第23図1～16・18	(+ -)	大畠山田Ⅱ	野鳥
h	沈線文+結節沈線文（条痕地文？）	第23図17	(-)	森岡山北	楓木下層
i	沈線+半截竹管刺突文、微隆起線+竹管刺突文	第23図24～26	(+)	土生田Ⅱa # II b	鶴が島台
j	縄文条痕、縄文縄文	第22図23～26	(+)	三カノ瀬Ⅱ 玉の木平B	船入島下層 鶴が島台
k	体部片（瓶文無文、瓶文条痕、条痕条痕）	第23図19・23他	(- +)	細野Ⅰ・四浦子 らもの貯び	田戸・大寺 子母口・野島

* 類別の記入は、村山盆地北～尾花川盆地にかけての遺跡出土例を中心とし、補足的に他地域の資料（遺跡名）を記入した。既式については、大よその編年の位置付としての目安とする。今後とも充分な検討と資料の蓄積が必要である。

期の土器類型を一覧とし、周辺地域（村山盆地北半の山麓、尾花沢盆地周縁）における従来の知見（加藤稔1982を中心とした。）、目安としての編年的位置付けについて記入したものである。これまでの資料との比較では、結節沈線文を区画線描出の主要な技法とする4類の存在（文様構成・器形等の面では第6類に近似し、大畠山遺跡に類似例を認める。）と、5類a、6類におけるa以外のb・c・dのあり方が目に止まる。同時に、7類c～eの類型は、これまで検出例のなかった大寺上層式に含まれる内容を持つ一群である。

8類については、赤石II式例に文様構成や胎土焼成などの諸点で類似するが、口縁部外面での施文法で異なる。赤石II式は、平行沈線と直交する短条痕文の組合さるもので、刺突による窩文は見られない。物見台式（大寺下層式）に併行しようか。8類は、大寺上層式に近い中間的様相を持つものであろうと私考するが、資料的に限られ定かでない。

山形県域における子母口式併行の土器様相については、山形市二百寺遺跡の絡条体圧痕文（軸のやわらかな原体）ある口縁部破片1点や、細野II式とされる1点の絡条体条痕文等の手懸りが断片的に捉えられているだけである。こうした中で、尾花沢市鶴子中原遺跡から本遺跡7類の仲間と共に2点の絡条体圧痕文土器（丸棒状の堅い軸）が採集された。二百寺遺跡例とはやや異なり、大寺上層式の内容に近似するものと言えるだろう。資料各々については本報告に間に合わせ掲載し得なかった。いずれ公表の機会を得たい。

9類は、野島式に併行する一群である。従来の資料をはるかにしのぐが、器形復元に至るものはない。微隆起線貼付技法の幾つかの類型、文様構成の一端等を窺い知り得ただけながら今後の研究に重要な手懸りを得た事となる。10類は、楕木下層式の一部に似る。11類は、沈線区画文と微隆起線による文様構成をもつ二種があり、土生田遺跡例等の他、新たな資料の類型が加わった。また、茅山式に相当する明確な土器は認めないが、12類とした繩文条痕、繩文縫文など早期末葉のものが若干出土している。

以上のように、いるかいで遺跡出土の繩文早期の土器群は、日計型押型文土器と相前後する無文土器・初期沈線文系土器、その他田戸下層式期の沈線文系土器を欠くものの、田戸上層式以降、早期末葉までの大半のものを含んでいる。資料的内容での新たな知見も数多い。後代「尾花沢盆地はエミシの土地との接触点」（加藤稔1980）と評される当地域の地理的環境とも合せて、村山盆地北半～尾花沢盆地にかけての早期文化の研究に光明を得た。

なお、前章で触れ得なかつたが、尖底部資料2点があり（図版11-22-23）、いずれも4ないし6類に伴うものと考えている。22では、3単位で施される幾分斜行する三本沈線と沈線間の小隆起線を認める他、尖底端が磨滅して底平となるのを知る。

前期の土器は、検出遺構の主体となる時期の所産である。時期的に初頭期～後葉までのものを含むが、その大半は大木1～2a式、大木5a式に含まれるものであり、その他の

もの若干である。各種別土器を従来の知見から各土器型式に比定するには客観的データ不足の感を否めないが、あえて試みれば以下のようなになる。1類・2類a・5類c（上川名II）、2類bの1部（第24図6・7・16・17）、3類・4類・5類a・6類a・7類c（大木1式）、2類bの1部（第24図2・3）、5類b・6類b・c・d・7類a（大木2a式）、7類b?・d・8類（大木2b式）。大木3・4式に係る土器の出土はない。

以下の9~12類の土器は、大木5a・5b・6式に各比定される内容をもつ。大方は、興野義一氏の提唱による大木5a式ないし大木5b式の一部に限られている。大木6式についても若干例（第25図20・21・22・27・26?）を認めるにすぎない。大木5b式と出来るものは第25図16・17・18・19・33等である。他については、無文地で輪積痕を残すもの、縄文が横走するもの、燃糸地文のみのもの等を含めて大木5a式と見なすことができようか。なお、沈線による山形文等の資料（図版16-8）も大木5a式に比定される。

中期・後期の土器群については論及すべき点も多いが割愛する。弥生中期の土器は、恐らく尾花沢盆地においては初出であろう。最近、本遺跡に近い細野地区で同期ないしはやや新しい時期の蓋形土器が得られている（大類誠氏の御好意で実見の機会を得た）。

2 遺構と遺跡の性格について

充分な検討を加えておらず、問題点等について明確にし得ないが、縄文早期の早い段階から生活領域での重要な役割を果して来たものと考えられる。住居遺構を確認できた時期は、縄文前期前葉、同後葉、縄文後期後葉である。縄文早期については、各期の炉穴等を中心とする数ブロックを認識できたが、該期の竪穴式住居は検出していない。前期後葉ではST2で認められる如く最低二回以上の拡張等が認められ、ある程度継続的な生活が営まれた形跡がある。さらに、台地縁辺部には幾つかの土壙群（フラスコ状が主体）がある。石器組成の様相、立地的環境ともからめて私考すれば、本遺跡が縄文時代の各期を通じて山麓における食物質食料採集のための基地的役割を担ったものと推測されるのである。この事は、祭記的遺物の欠如（但し前期末と考えられる块状耳飾りが1点であるが）他、前期後葉を除く各期の遺構の単発性等からも裏づけられるのではなかろうか。

〈引用参考文献〉

- 1 名和達朗他1982「分布調査報告書(10)」調査報告書第61集 山形県教育委員会
- 2 加藤 稔 1980「日本最大の石碑墓」「尾花沢風土記」尾花沢市史史編纂委員会
- 3 加藤稔編 1982「村山市史別巻1 原始・古代編」村山市史編纂委員会
- 4 山口博之 1980「山形県内の早期中葉の土器群について」「弓張平A遺跡」
- 5 興野義一 1970「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」「古代文化」第22巻第11号
- 6 北林八洲晴1976「千歳遺跡(13) 発掘調査報告書」調査報告書第27集 青森県教委

* これらの他、記すべきものが多くあるが紙数の都合から割愛せざるをえず、ご寛容を願うと共に非礼をおわびする。

表-6 圖版中遺物出土地区（遺跡）層位一覧

NO	出土地点	層	9-33	40-103	E	12-1	39-92	II	12-67	34-99	E	15-37	#	#	16-16	1次C區	II	17-29	34-95	II
8-1	中東		9-34	43-92	#	12-2	34-94	II	12-68	1次A區		15-38	#	#	16-17	X	O	17-38	44-92	#
8-2	#		9-35	E P36	F	12-3	42-95	II	12-1	36-99	II	15-39	#	#	16-18	1次C區	II	17-31	44-95	#
8-3	#		10-1	39-95	E	12-4	44-91	#	13-2	39-105	S T 3	15-40	#	#	16-19	40-97	II	18-1	#	
8-4	#		10-2	41-95	E	12-5	#	O	13-3	E P44	F	15-41	#	#	16-20	35-98	E	18-2	1次C區	II
8-5	#		10-3	39-97	E	12-6	41-91	II	13-4	#	15-42	#	#	16-21	C K 2	O	18-3	190-41	I	
8-6	#		10-4	60-95	#	12-7	#	E	13-5	43-90	E	15-43	#	#	16-22	S K 4	F	18-4	10-29	II
8-7	#		10-5	42-98	#	12-8	S T 32	F	13-6	E P44	F	15-44	#	#	16-23	35-109	E	18-5	10-46	II
8-8	#		10-6	12-28	#	12-9	E P107	F	13-7	#	15-45	#	#	16-24	49-101	II	18-6	A E X	O	
8-9	#		10-7	X	O	12-10	51-96	I	13-8	X	O	15-46	#	#	16-25	S K 36	I	18-7	#	#
8-10	#		10-8	39-97	F	12-11	S T 3 F	I	13-9	E P44	F	15-47	#	#	16-26	X	O	18-8	42-99	#
8-11	#		10-9	38-103	E	12-12	43-99	II	13-10	#	15-48	#	#	16-27	S K 4	F	18-9	41-97	#	
8-12	#		10-10	15-26	#	12-13	#	E	13-11	41-87	E	15-49	#	#	16-28	43-98	E	18-10	36-93	#
8-13	#		10-11	42-97	#	12-14	39-104	#	13-12	#	15-50	#	#	16-29	43-92	E	18-11	40-97	#	
8-14	玉野原A		10-12	42-102	#	12-15	105-44	I	13-13	#	15-51	#	#	16-30	X	O	18-12	39-92	#	
8-15	原の内A		10-13	S K 27	F	12-16	45-93	I	13-14	48-97	#	15-52	#	#	16-31	42-90	II	18-13	35-100	#
8-16	#		10-14	39-97	B	12-17	41-89	F	13-15	39-101	#	15-53	#	#	16-32	S T 3 b	F	18-14	S K 25	F
8-17	#		10-15	12-28	#	12-18	S T 32	F	13-16	X	O	15-54	S T 6	F	16-33	34-104	E	18-15	12-25	II
8-18	原の内C		10-16	33-11	#	12-19	37-104	II	13-17	35-95	E	15-55	#	#	16-34	A E X	O	18-16	42-96	II
8-19	袖 神 C		10-17	13-29	#	12-20	42-97	I	13-18	X	O	15-56	#	#	16-35	S T 3	F	18-17	#	#
8-20	#		10-18	91-44	E	12-21	36-102	#	13-19	46-91	H	15-57	#	#	16-36	42-99	H	18-18	36-95	#
8-21	#		10-19	S K 19	F	12-22	35-99	#	13-20	42-102	#	15-58	#	#	16-37	A E X	O	18-19	42-93	#
8-22	#		10-20	X	O	12-23	41-97	I	13-21	42-98	#	15-59	S K 7	F	16-38	42-100	E	18-20	S T 2 b	F
8-23	ソリマ A		10-21	35-105	B	12-24	37-103	I	13-22	51-96	I	15-60	#	#	16-39	A E X	O	18-21	28-103	H
8-24	# B		10-22	29-106	#	12-25	26-98	#	13-23	#	15-61	S K 8	F	16-40	35-98	E	18-22	44-93	#	
8-25	# #		10-23	12-33	#	12-26	44-91	I	13-24	X	O	15-62	#	#	16-41	41-102	E	18-23	S K 3	F
8-26	西畠地 F		10-24	S K 3	F	12-27	41-74	I	13-25	1次A區	H	15-63	#	#	16-42	39-97	H	18-24	47-99	H
8-27	#		10-25	11-21	H	12-28	38-103	#	14-1	S T 30	Y	15-64	#	#	16-43	35-98	E	18-25	42-98	#
8-28	#		10-26	10-37	#	12-29	35-100	I	14-2	E L	F	15-65	#	#	16-44	21-103	E	18-26	1次C區	II
8-29	東 山		10-27	1 次 C 区	H	12-30	#	E	14-3	40-95	H	15-66	#	#	16-45	45-93	E	18-27	#	#
8-30	#		10-28	X	O	12-31	45-98	#	15-1	34-99	#	15-67	#	#	16-46	S T 2 s	Y	18-28	46-94	II
8-31	五野原 A		10-29	1 次 C 区	H	12-32	36-95	#	15-2	#	15-68	#	#	16-47	S K 12	F	18-29	10-12	H	
8-32	安久士		10-30	S K 3 Y	I	12-33	35-94	#	15-3	37-96	S K 12	F	16-48	S T 2 a	F	18-30	105-44	I		
8-33	東大寺 D		10-31	S K 32	F	12-34	37-102	#	15-4	34-99	#	15-70	#	#	16-49	36-99	E	18-31	S T 1	F
9-1	S K 4	F	10-32	S T 2	F	12-35	49-102	I	15-5	37-101	I	15-71	S K 13	F	16-50	42-94	#	18-32	43-95	H
9-2	#		10-33	にひく 今		12-36	S T 3	F	15-6	#	15-72	S K 14	F	16-51	38-103	I	18-33	34-104	#	
9-3	#		11-1	43-95	E	12-27	38-95	#	15-7	41-98	#	15-73	S K 17	H	16-52	35-99	E	18-34	35-100	#
9-4	#		11-2	S K 37 F		12-38	34-91	#	15-8	S K 1	F	15-74	S K 40	F	16-53	40-96	#	18-35	39-97	#
9-5	#		11-3	42-98	H	12-39	37-103	I	15-9	#	15-75	S K 26	H	16-54	37-96	H	18-37	#	#	
9-6	42-98	H	11-4	42-97	E	12-40	43-93	H	15-10	#	15-76	#	#	17-2	1 次 C 区	H	18-37	#		
9-7	39-104	#	11-5	45-92	#	12-41	X	O	15-11	S K 8	F	15-77	#	#	17-3	45-92	H	18-38	41-91	H
9-8	45-95	#	11-6	S K 15	F	12-42	#	#	15-12	#	15-78	#	#	17-4	38-104	#	18-39	34-104	#	
9-9	#		11-7	43-101	E	12-43	#	#	15-13	#	15-79	#	#	17-5	45-103	I	18-40	36-100	#	
9-10	39-104	#	11-8	S T 3 a	F	12-44	38-88	I	15-14	S K 10	F	15-80	#	#	17-6	35-95	H	18-41	S K 8	F
9-11	#		11-9	E P36	F	12-45	38-102	#	15-15	S T 2 a	F	15-81	#	#	17-7	X	O	18-42	A E X	O
9-12	43-97	#	11-10	S K 22	F	12-46	#	O	15-16	#	15-82	#	#	17-8	S K 30	F	18-43	42-93	H	
9-13	44-93	#	11-11	X	O	12-47	43-91	H	15-17	#	15-83	#	#	17-9	X	O	18-44	42-92	#	
9-14	43-92	#	11-12	39-106	H	12-48	38-102	#	15-18	#	15-84	#	#	17-10	42-93	H	18-45	39-98	#	
9-15	X	O	11-13	1 次 C 区	I	12-49	42-92	#	15-19	#	15-85	#	#	17-11	X	O	18-46	1 次 C 区	H	
9-16	39-104	H	11-14	X	O	12-50	48-95	#	15-20	#	15-86	#	#	17-12	38-103	H	18-47	X	O	
9-17	S T 2 F		11-15	E P36	F	12-51	44-93	#	15-21	#	15-87	#	#	17-13	45-91	#	18-48	35-95	H	
9-18	X	O	11-16	S K 1	F	12-52	42-93	#	15-22	#	16-1	S K 30	F	17-14	41-102	#	18-49	42-96	#	
9-19	43-95	#	11-17	X	O	12-53	1 次 C 区	I	15-23	#	16-2	#	#	17-15	X	O	18-50	S T 2 a	F	
9-20	S K 38	F	11-18	43-97	E	12-54	36-102	H	15-24	#	16-3	#	#	17-16	S K 1	F	18-51	32-95	#	
9-21	X	O	11-19	45-95	#	12-55	37-96	#	15-25	#	16-4	#	#	17-17	S T 2 a	#				
9-22	39-96	H	11-20	43-95	#	12-56	38-102	#	15-26	#	16-5	S K 59	#	#	17-18	43-93	H			
9-23	39-98	#	11-21	S K 1	F	12-57	#	O	15-22	#	16-6	#	#	17-19	1 次 C 区	H				
9-24	45-93	#	11-22	43-99	H	12-58	34-99	#	15-28	#	16-7	#	#	17-20	10-44	H				
9-25	29-98	#	11-23	41-101	#	12-59	41-106	H	15-29	#	16-8	S K 61	#	#	17-21	A E X	O			
9-26	37-104	#	11-24	39-97	E	12-60	43-99	#	15-30	S T 2 a	Y	16-9	#	#	17-22	39-95	H			
9-27	39-98	#	11-25	35-90	#	12-61	35-98	#	15-31	#	16-10	#	#	17-23	S T 2 a	Y				
9-28	45-93	#	11-26	S K 7	F	12-62	43-91	#	15-32	#	16-11	S K 62	#	#	17-24	39-95	H			
9-29	42-97	#	11-27	S T 1	F	12-63	41-98	#	15-33	#	16-12	S K 72	#	#	17-25	S T 2 a	Y			
9-30	S T 2 F		11-28	S K 3	F	12-64	#	#	15-34	#	16-13	#	#	17-26	42-95	H				
9-31	X	O	11-29	S K 8	F	12-65	43-98	#	15-35	#	16-14	S K 24	#	#	17-27	41-97	#			
9-32	10-46	H	11-30	#	#	12-66	43-96	#	15-36	#	16-15	#	#	17-28	39-102	H				

#ゴリックは無 1次

調査で出土。

#1次C区等は、無

1次調査等出土の處である。

図版 1



道路遠景



C地区近景



B・C地区近景



C地区近景



A地区近景



C地区カッティング



B地区近景



C地区カッティング



圖版2

図版 3



ST1 全景



ST3a - 3b



ST39 - S_x40 全景



ST52 全景



SK53 - 71 全景



SK5 全景



SK74 土層断面



SK 7 土層断面

图版 4



SK22 检出状况



SK45·46·44 土层断面



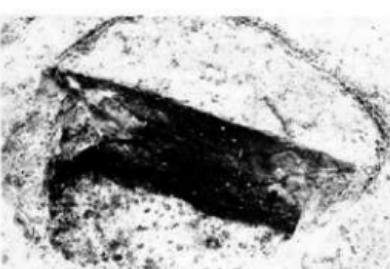
SK52 检出状况



SK51 全景



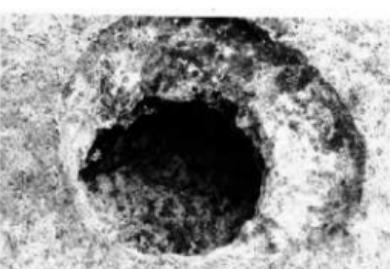
SK17 全景



SK60 土层断面

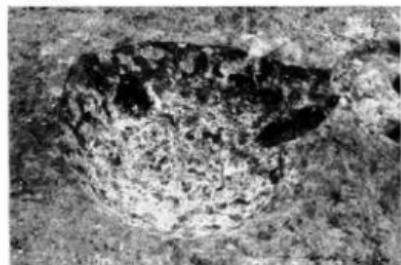


SK61 土层断面



SK61 全景

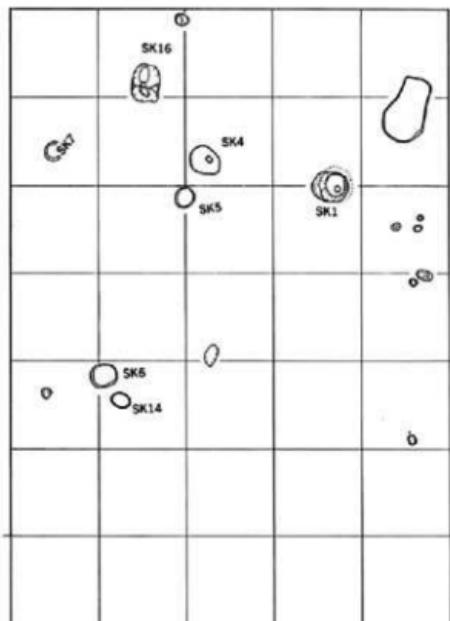
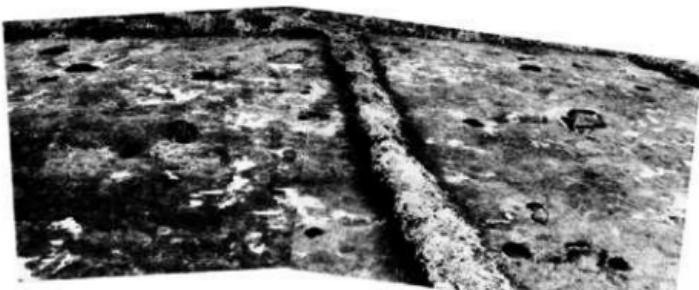
図版 5



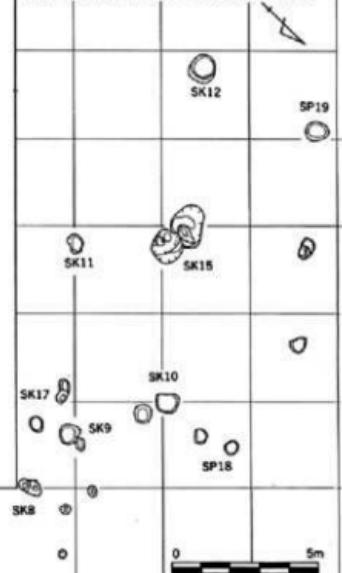
SK63 - 64



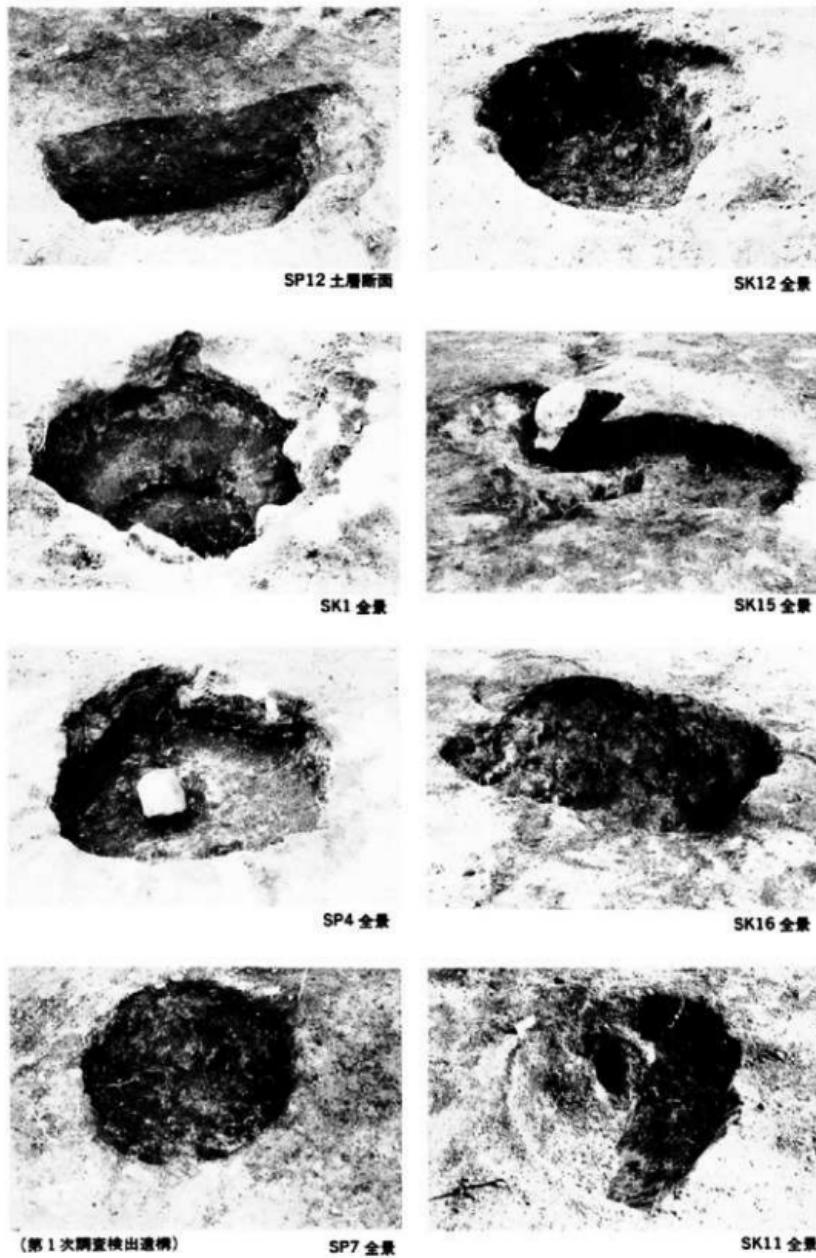
SK60 - 61 他 フランシスコ状土壤群



第1次調査 A 地区遺構検出状況



図版 6



図版 7

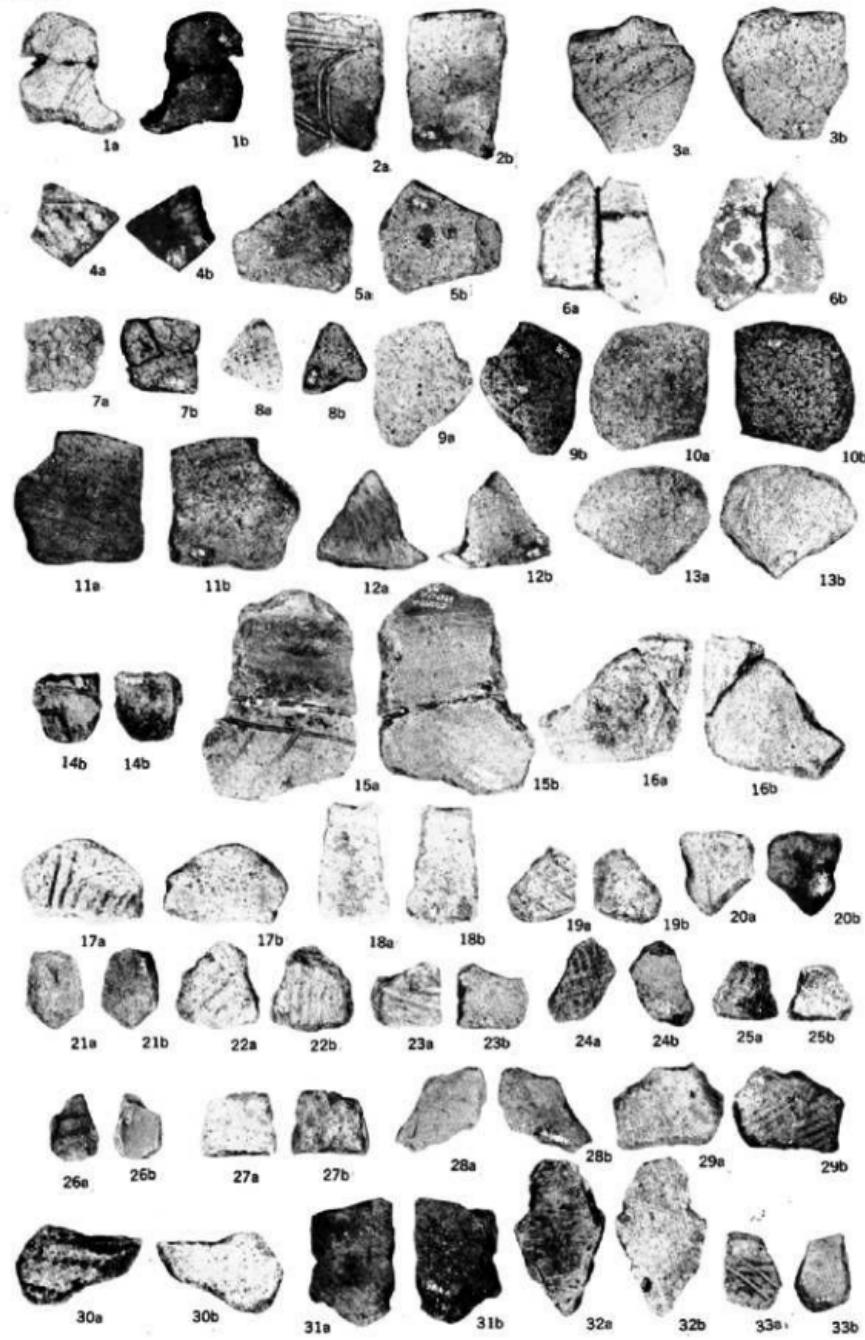


SD2 土層断面

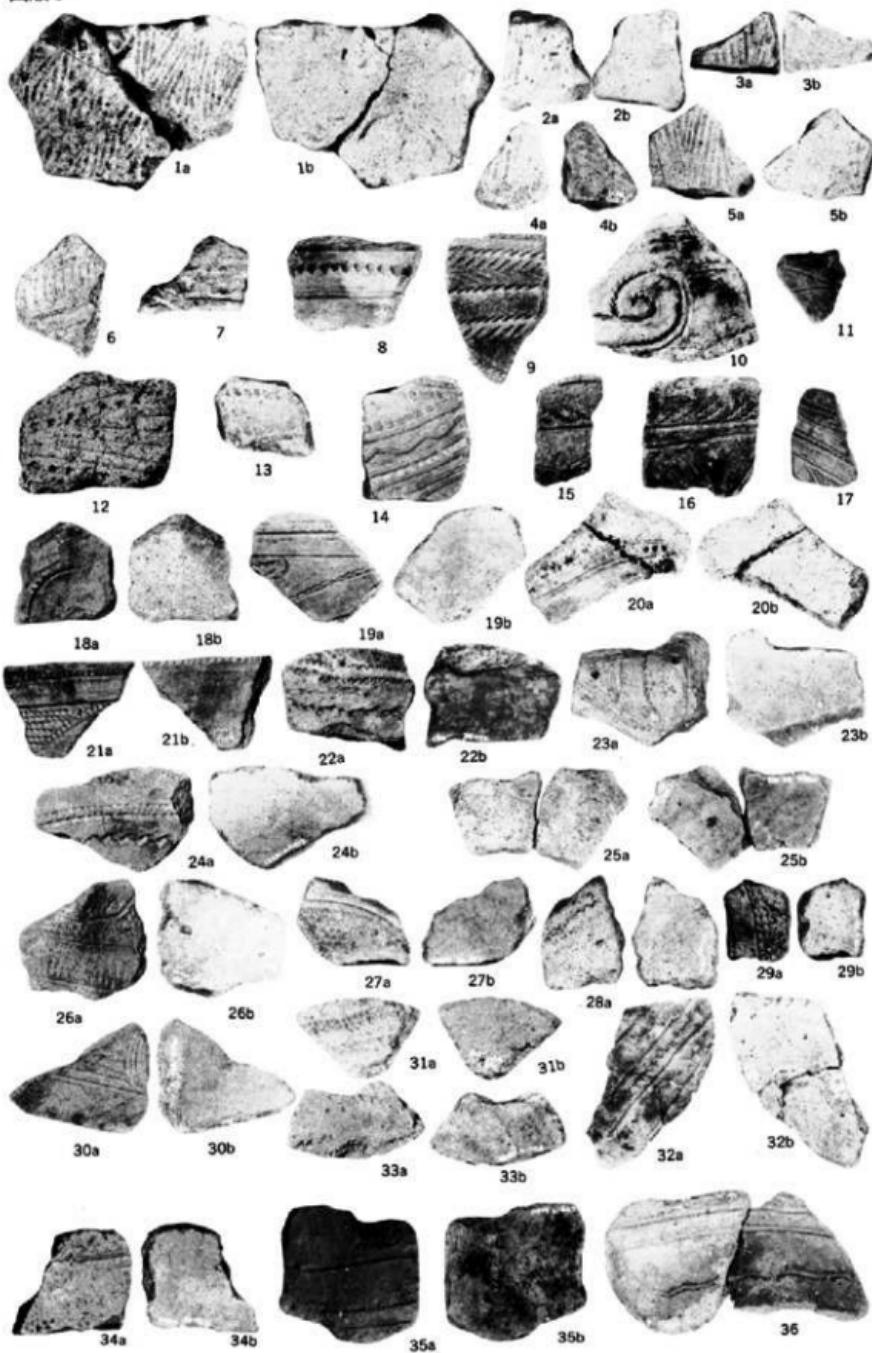


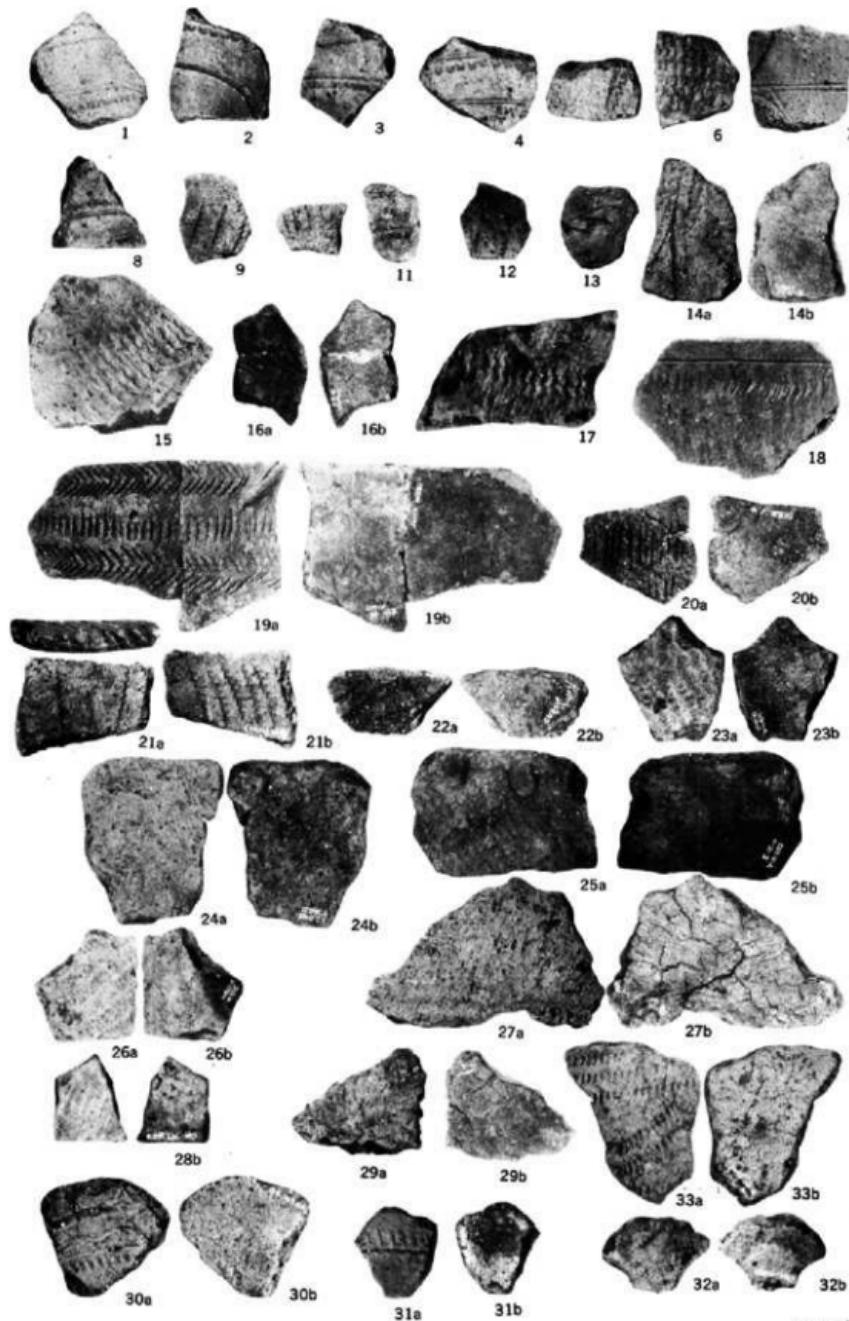
ST20 全景

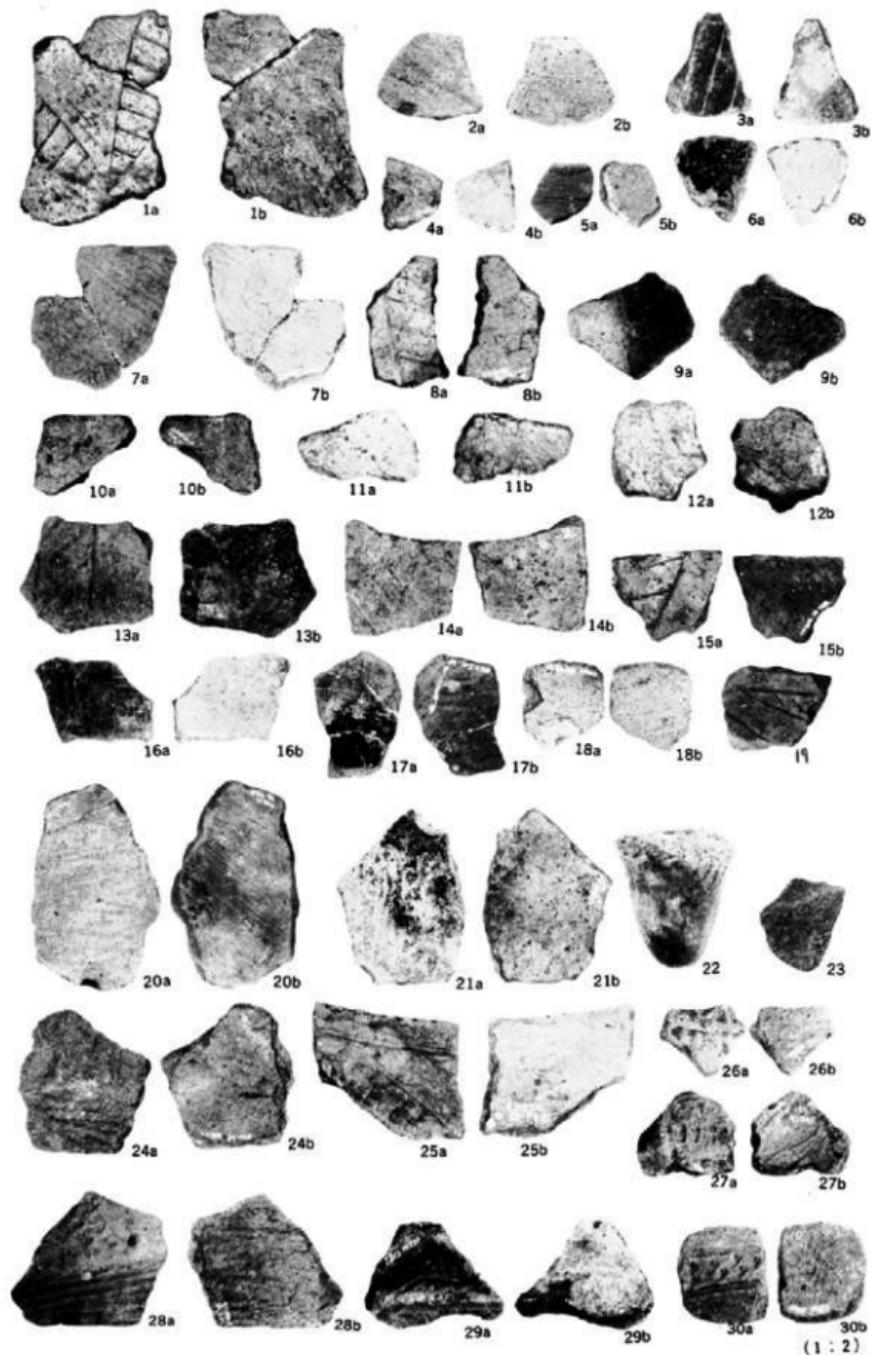
図版 8



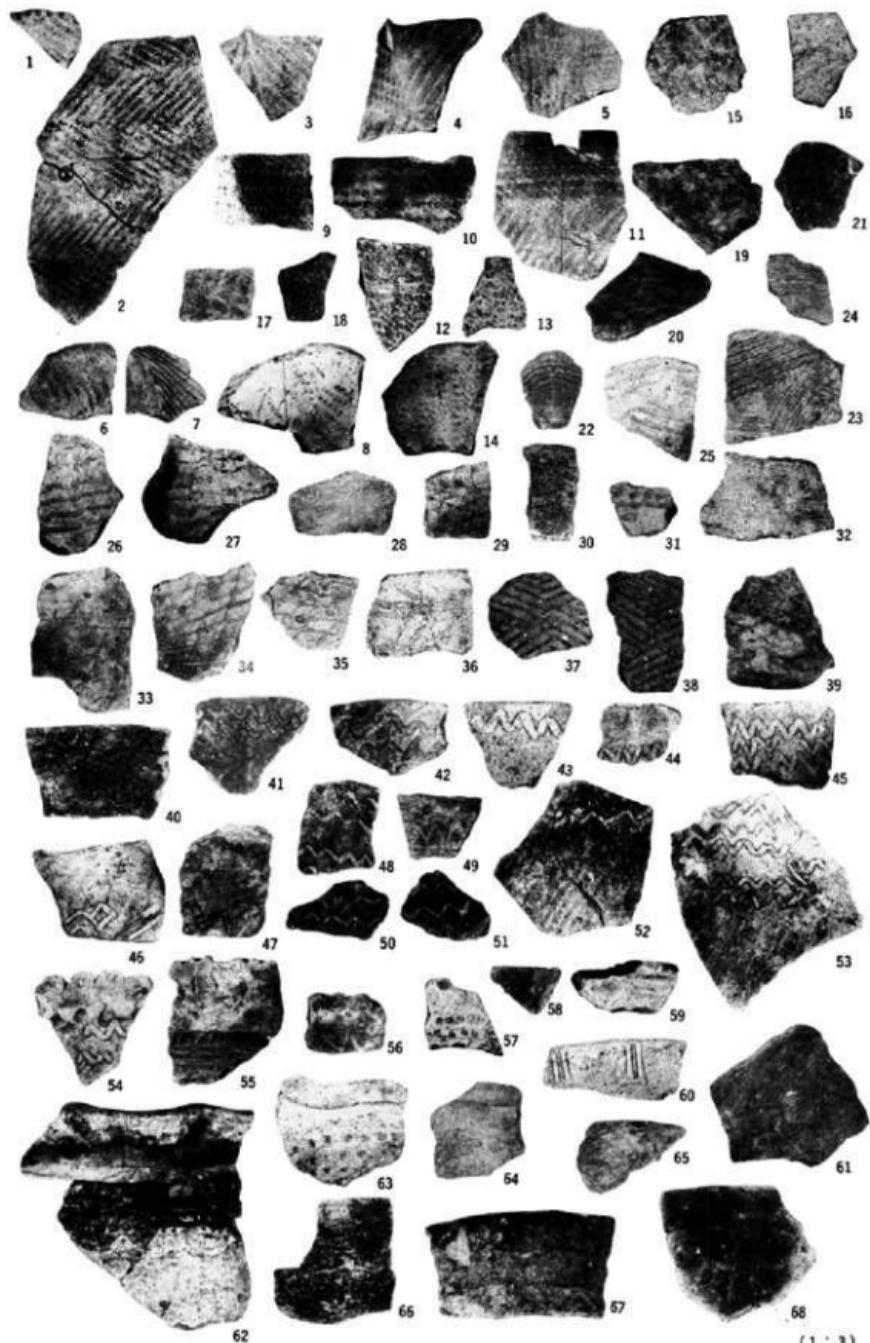
図版9



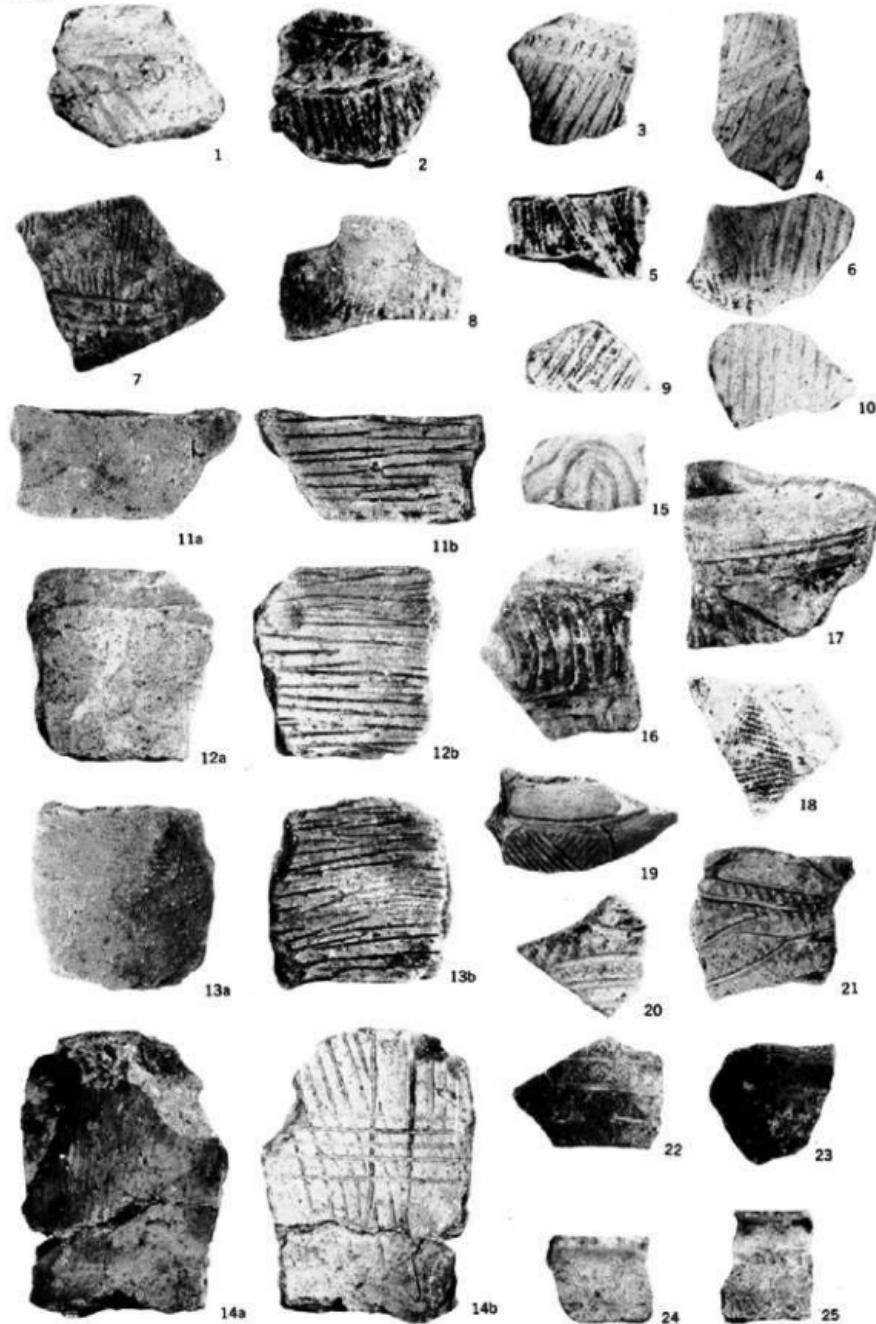




図版12



図版13



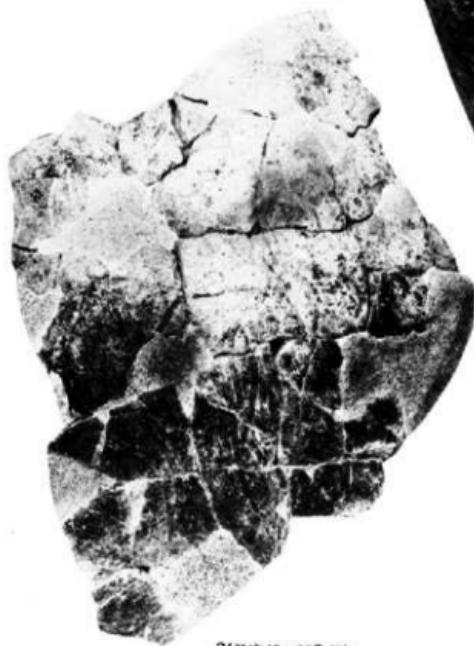
(1 : 2)



1(ST20Y)



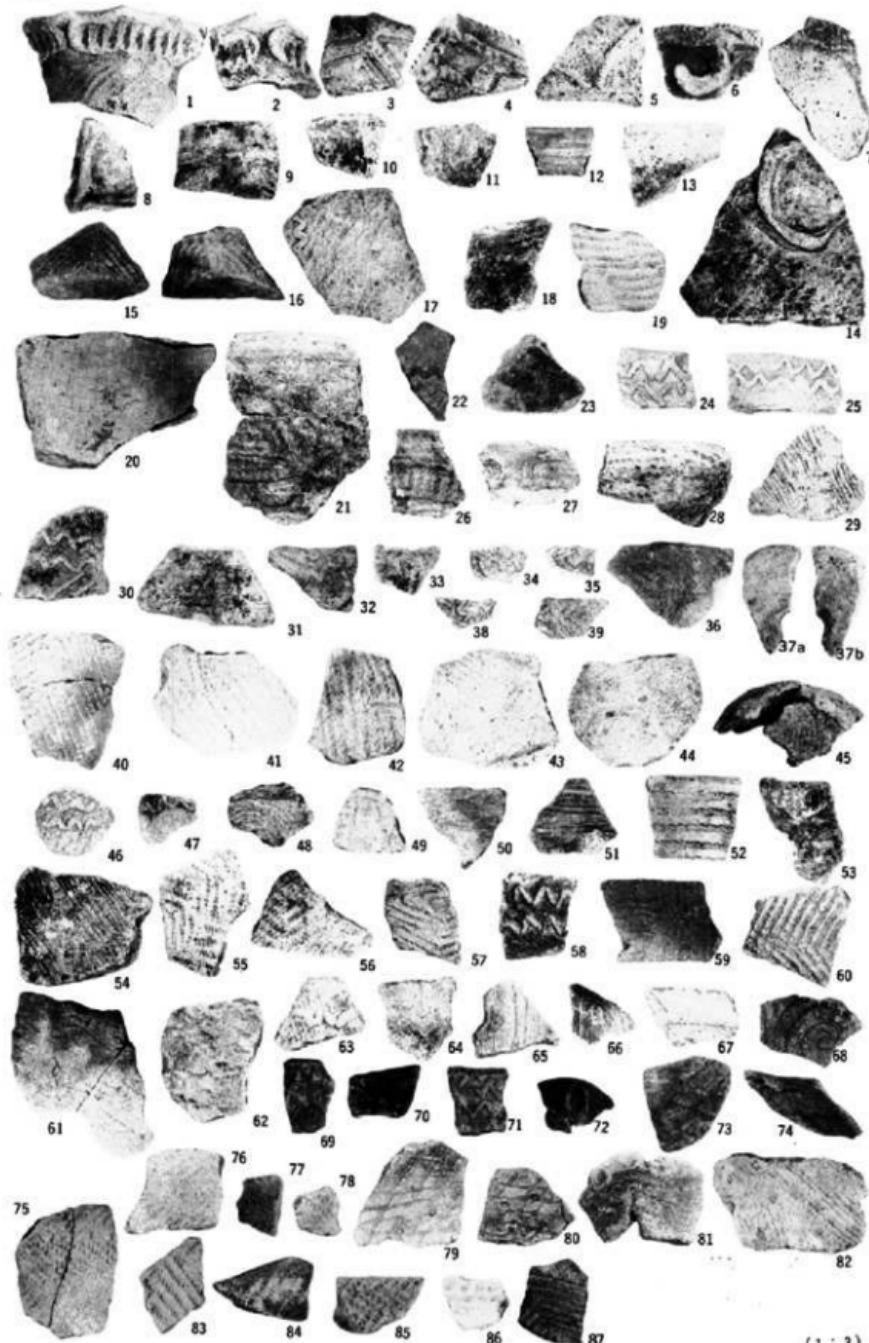
2(ST20EL, 炉体)



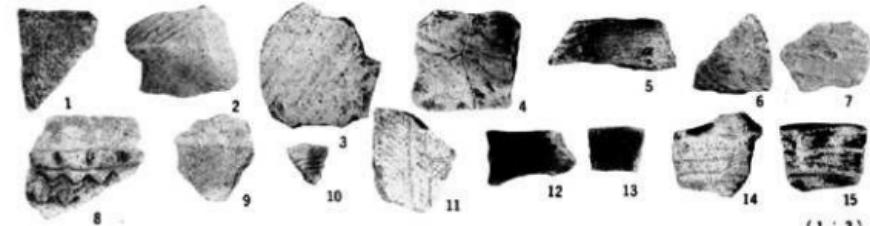
3(II次40—95G II)

(1 : 3)

図版15



圖版16



(1 : 3)



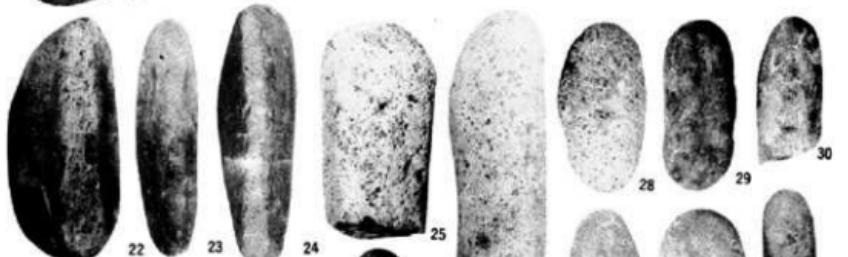
16

17 18

19

20

21



22

23

24

25

28

29

30



27

31

32

33



36

37

42

43

44

45

46



47

48

49

52



40

41

48

49

50

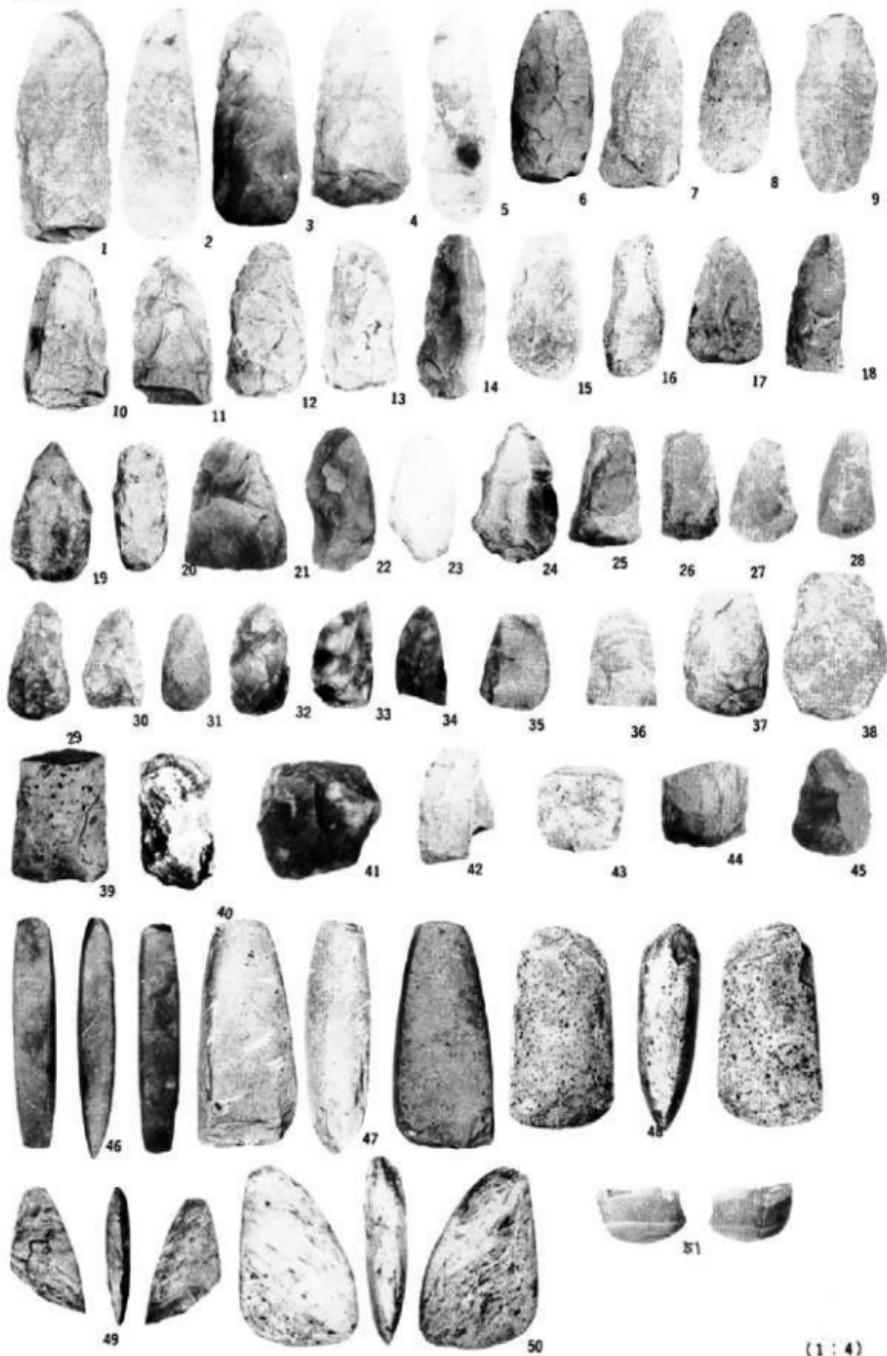
51

53

(1 : 4)

図版17





山形県埋蔵文化財調査報告書第69集

い る か い 遺 跡

発掘調査報告書

昭和58年3月28日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 東北農政局
山形県教育委員会
印刷 大風印刷